

アイドルマスター 最高 への挑戦

ヒロ@美穂担当P

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある青年達が『伝説』を打ち破った後、首都高は静かになってしまった。そしてその伝説達を追っていたある人物が事故がきっかけて首都高から姿を消す。

静かな首都高を駆け抜けるGTR。ド派手なGTRを駆るのはなんと女。ドラテクは他を寄せ付けないがそれ以外の事は壊滅的な訳あり少女「如月明日翔」とそんな明日翔の幼馴染で車に関しては超一流だが走りは苦手な少女「柊木希」の2人組。

理由。そしてもう1人。黒いスープレを駆る人物。765プロのアイドル「菊地真」が走る

3人の出会いが自分達、そして周りの人生も変える。首都高を走り続けてきた者達も巻き込んだ出会いは未来へと続く。

《注意!!》

この物語は「アイドルマスターシリーズ」と「首都高バトル」など様々な作品とのクロスオーバー作品です。また、「バンドリ！」の人物が主人公によく関わります。バンドリが苦手な方は注意。

また、前々作「疾走のR」と前作「銀色の革命者」の続編です。そのためアイドルの年齢が「原作+2歳」となります。

前2作の解説は本編ではあまり入れないので2作を読んでおくことを推奨します。

※この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、出来事などは一切関係ありません。

実際の車の運転では交通ルールを守り、安全運転を心掛けてください。

目次

M e m o r y 0 9	M e m o r y 0 8	M e m o r y 0 7	M e m o r y 0 6	M e m o r y 0 5	M e m o r y 0 4	M e m o r y 0 3	M e m o r y 0 2	M e m o r y 0 1	M e m o r y 0 0
意味	孤独	選択	怪物	未知	蓮	夢斗	真	明日翔と希	過去
213	193	156	126	94	66	40	21	8	1

Memory 00 過去

真夏。

それは1年で最も暑い時期。

そんな真夏の深夜の湾岸線を走る1台の青い車。GT-R (R35)だ。
そしてそれに乗るのは女性2人。違和感すら感じそうな組み合わせ。

「……いるかな」

「いるよ、たぶんね」

運転する女性は助手席ナレシートに座る相棒に聞いた。

彼女に会うには数年ぶりだ。つい先程彼女を乗せたばかり。しかし昔からどこか抜けていて、でもはつきりとした強さを持つその性格は変わってない。

「いい加減結婚したら？ 希はいいお嫁さんになるよ」

「私はまだ結婚しないよ」

もうそんな歳になってしまった自分達。昔を懐かしむ事が最近多くなってきた。

「……あの人は今何をしてる？」

「アイドルというよりはタレントやってるよ」

「テレビ番組によく出てるよ。みんなと一緒にね」

彼女は憧れた人と思う。

「昔からかっこいいもん。今でも憧れる」

「はいはい」

変わらない所もあった。

「違いがよくわかる。年代が進んで進化したって感じる」

「あの時よりは確実にパワーないけどね（笑）」

このRを2人がかつて乗っていた愛機と重ね合わせる。それは当時としても現在から見ても明らかにおかしな性能だった。

各部のメカニズムは当時の物から洗練されている。このRは当時とはまるで別物だろう。

しかし、それはこのRをチューンしたかつての愛機と比べてるから出る答え。
純正ノーマルのこのRがまだ可愛いような化け物だったからだ。

「もうあんな感じの車は乗れないな（笑）」

「公道では絶対いらぬよ。普通に走るなら軽自動車でもいいと思うな」
「だよ。でも、あの時が……あたし達の青春」

「そこ」に集まってる者達がどうなってるか想像しながら2人は進む。

2012年11月。

富士スピードウェイを駆ける赤いGTR。

「攻める……！行け……っ!!」

勝利を目指して走る。リスクなんて関係ないようにハードプッシュ。

「これだけのアタック、車が持つのか!？」

実況者がヒートアップする。観客席全体が揺れるような熱気。

「2番手になった!!モチュールが2番手だ……!」

「あと……！台いいい！」

アクセル全開。理性がどこかに吹っ飛んでいくのがわかった。

マージンを全部削る走り。鬼気迫るような走りだ。破綻という可能性が目に見えて高くなっている。

自分がオーバーヒートするのがわかる。

テンションが異常なまでに上がる。もうクーリングが効かない。

それでも前に出るために高いテンションを維持したまま攻め続ける。

「ラストツ!!」

前の車をパスした。

「速すぎるっ!!」34号車、原田が今まで見た事がないような攻めを見せたーっ!」
サーキット中のボルテージMAX。誰もが彼女の勝利を確信していた。

……はずだった。

その赤い車^Rが姿勢を崩し、コースオフしてクラッシュユパッドに突っ込んでいくのは一瞬だった。

吹き飛ばすパーツの向こうでフェンスを乗り越えそうになっていた赤いGT-Rが見えたのだ。

回収班のスタッフ達がクラッシュしたGT-Rのドライバーを救出しにかかる。彼女は動けないようだ。

「ああああああああ……っ」

痛みに苦しむ彼女を車内から脱出させる。

どうやら足がやられたらしい。1人で歩行できず、スタッフの肩を借りている。やがて救急車が来た。

彼女は救急車に乗せられてコースを後にした。

回収されたGT-Rは酷い状態だった。

フロント部分は全損、クラッシュ時にエンジンは破損していた。

フレームが大きく歪む程の衝撃。クラッシュの凄まじさを物語る。

モチュールG T—Rのドライバーだった原田美世は左足骨折と診断される。

他にもクラッシュ時の負傷が元で入院生活を余儀なくされ、彼女はスーパードライバーとア
イドル活動という表舞台から姿を消す……。

時は流れて2013年夏。

首都高に情熱を燃やした者達の物語の記憶はここから始まる。

Memory 01 明日翔と希

「希ー、お願い」

「明日翔もこれくらい自分でやってほしいな」

「だってあたしできないし」

あたしの名前は如月明日翔^{きさらぎあすか}。大学1年生。

あたしを一言で言うところ「女子力ない女子」。

料理が下手、家事ができない。女の子として重要なステータスが致命的に低い。

あたしが家事とかそういうのをしなくてもいい家庭だったのもあるのかもしれない。

「明日翔、聞いてる？」

彼女は柊木希^{ひいらぎのぞみ}。あたしの幼なじみ。

幼稚園からの付き合いでいつも一緒にいた。あたしが男っぽいなら彼女は女っぽい。

彼女はクラス1可愛い子と言えどという話題で必ず名前が出る。

実際あたしはボーイッシュって言われる。名前でまず男と間違われるし。

私が持っていない女子力の代わりであろう運動神経の良さに目をつけてあたしにス

ポーツの助っ人を頼むクラスメイトが多かった。あ、これは中学校の話ね。

「これだといつまでも苦勞するよ?」

「うう……」

私が希に頼んでた事は史学の宿題。終わらせられなかったあたしは休み時間にやるはめに。

私にとって講師の言っていることがまるで外国人が話す言葉のよう。希は勉強できるからいいな。

「希は世界史の教師目指してるからできるんでしょ」

「なにそれ、勉強の積み重ねだよ」

希は将来世界史教師を目指してるらしい。日本史で苦勞したあたしは彼女の足元にも及ばない。

「明日翔またやってるね」

「リサ姉助けて」

「リサちゃん助けなくても大丈夫。明日翔がりサちゃんに甘えつばなしになる」

彼女は今井リサ。

彼女はガールズバンド「Roselia」のベース担当。

Roseliaについて軽く触れておくとプロ並みの技術をメンバー一人一人が持つという本格派ガールズバンド。あたしも一度彼女達のライブを見たけど音楽に疎いあたしでも「本物」だと直感的にわかった。

彼女はRoseliaのリーダーである湊友希那の幼馴染。若干周りと話すのが苦手な彼女を支える彼女の良き理解者。

ギャルなんだけど彼女は周りのフォロワーが上手い性格に「面倒見がいい」「料理上手」「趣味が編み物」「おぼけが苦手」「ぬいぐるみが好き」など女子力最強。一部では「慈愛の女神」とも呼ばれるらしい彼女。

あたし勝てないよ（涙目）

そんな事もありあたしは彼女をリサ姉と呼ぶ。

「終わった……」

休み時間を全部使い終わした宿題を提出したあたしは教室に帰ってきた途端机に

突っ伏した。

「ちゃんとやっておけばこうならないんだよ？」

「はい……」

希に呆れられる。そりや自分のせいだけどき。

放課後。

「あたしはこの後バイト」

「そっか。じゃあまたね」

あたしは希と別れる。ガソリンスタンドでのバイトのためだ。

あたしはバイトをしているがバイトはスタンドでのバイトだけではない。

他にはコンビニでのバイトなど複数のバイトを掛け持ちしている。

何故かと言うと……。

「遅いよ」

「すみません！」

店長に謝りながら支度し始める。急いで制服に着替えて仕事を始めた。

午後7時。

「お疲れ様でしたー」

あたしはバイトを終えて帰り道……ではなく次のバイト先のコンビニへ。

「品出しお願いねー」

「はーいー」

先程のバイトから休む暇もなく働いている。

正直無理だと思う。でもやらないといけないワケがある。

でもあたしはあまり勉強が得意なわけではないのでやれる事は少ないんだけど。

今日のバイトを全て終わらしてあたしは家に帰る。ま、アパートだけどね。携帯の時刻を見るともう次の日になっている。

「はー……っ」

どつと疲れがあたしの意識を支配する。

「もう少しだけ我慢してね」

窓の外にいる相棒に言う。

あたしはこの後約5時間寝て学校にまた行かないといけない。目を瞑ると一瞬で外からの情報が遮断されていった。

次の日も学校が終わった。

あたしは今日はバイトなし。その代わり希と行くところがある。

あたしは家に直行。車のキーを持って車に乗る。

エンジンをかけるとお世辞でも静かとは言えない爆音が轟く。
軽くアクセルを煽り、調子を確認。フリツピングは問題ない。行けると判断しあ
たしは車を出す。

「ごめん、待った？」

「全然。行こっか」

希を車に乗せる。そして向かうのは首都高速道路。

「いい調子をキープできてるみたいだね」

「バツチリだよ。もっと行けるっ」

あたし達が乗る車……ピンク色のGTRは首都高速道路を猛スピードで走る。

若干大きい車だがソレを感じない動きができる。

「3速が伸びにくいんだよね、今のギア比」

「そう？じゃあ後でやり直すから」

「お願い、希」

G T—Rのセッティングについての感想を述べる。

あたしができるほぼ唯一の事。それは車を上手く走らせる事。

でも車を上手く走らせる事ができてもどこがダメだとかここが壊れたとかそういうのがわからない。

ちなみに希の実家は自動車整備工場。希は幼い頃から手伝いでいろいろな車に触ったそうで整備の腕は超一流。

チューニングもできるため、あたしはG T—Rのチューニングを彼女に任せている。

希はチューニングなどは得意だが運転は本人曰く下手だという。あたしは首都高でのバトルなどを好んでやるが彼女はそういうのに向いてないという。

だからあたしと希は2人で一緒に走らないとやっていけない。ラリーで言うドライバートコ・ドライバートコのような感じ。

「でもさ、これでも全然いい!!」

理屈抜きで頭を真っ白にして走れる。

ストレスとか何もかもが吹き飛ぶスリル。これだから首都高を走るのをやめられない。
い。

ふつーに見たら当たり前だけど犯罪行為。それは自分が一番わかってる。

だが、一度でもハマると抜け出せない魔力のような中毒性。だからのめり込んでいく。

そうやって自分を正当化しようとしてたんだと思う。

数時間後。

「またね、希」

「また明日」

あたしは希を降ろして自宅へ。

上がっていたテンションがゆっくりと戻っていくのがわかる。

明日は学校なんだけどバイトが入ってるため明日は学校に行かず、一日中バイトだ。

それがあたし、如月明日翔のやってる事だった。

都内某所。

「遙一、いるか」

「夢斗？早いですね」

「行こうぜ、病院へ」

「ですね」

ある青年と少女の2人が建物を出てすぐ近くの駐車場に歩いていく。程なくして銀色のランサーエボリユーシヨンと青いインプレッサが病院へ向かっていった。

「撤退は考えたくなかったがな……」

男が悲しそうな表情を浮かべる。

長年続けた事をヤメる悲しさ。辛い事も嬉しい事も仲間達と一緒に体験した。愛着があるチームを解散しないといけない決断は思い。

「このシーズンで菊地真一レーシングは解散だ」

チームリーダーである菊地真一は決断。
今シーズンをもってチームを解散しレースから撤退すると。

同時刻、ここは首都高速都心環状線（C1）。

外回りを駆け抜ける銀色の機影があつた。

「何でそんな事言うのさ……。父さん」

アイドル菊地真が駆るスープラ（JZA80）がテクニカルな区間が多いC1のコーナーを抜けた。

あたしの回想は始まったばかりだ。
僅かな間だけの……とびっきりの思い出。

Memory 02 真

あの人は今も元気だと希には言ったけど実際はどうなんだろう。あたしもよくは知らない。テレビなんて最近ロクに見てない。レーザーになってからテレビ見てないし。

まあ、元気だと思う。無責任だなー……あたし。

あたしの次の記憶はあの人……菊地真に会った時の事だ。

「希ちゃん」

「どうしたの、彩ちゃん」

希は……丸山彩ちゃんとなんか話してる。

女子力高い希はなにかと頼られる事が多い。たまに男子がアレな事を聞くけどあつしが止めないとそういう女の子の秘密とかも全部言ってしまう。

「91だよ?」と自身のバストサイズを言ってしまった時には大騒ぎになったものだ。あつしも胸はあるって思ってるけど希には勝てない。80あればいいと思ってたあたしは90以上ある彼女に負けました。

ちなみに言っておくとあたしは当時83くらいだった。

そこ、ヘンな想像しない。というかあたしはヘンタイじゃないからね?」

「ダルい」

あたしはバイト疲れでぐったりしてた。

「しつかり休もう?」

「希!!あたしも必死にやらないと生きてけないのっ!」

あたしは休む暇がない。何故かって?車のためだ。

「しかし明日翔ってすごいよね。自分の力だけでGT-Rを買うってさ」

「あたしだっていろいろあるんだよ……。ぶっちゃけ車のせいでこうなった」

あたしの実家は実はけっこう大金持ち。あたしはその一人娘だった。

だからあたしの世話は周りの人がやってくれた。

だからあたしはフツーにできることができない。あたしの身分が女子力の無さに直結してるみたいなの。

話を戻すとあたしはどうやってG T—Rを買ったかというところ自分で働いてだ。普通の人から見たらそれが当たり前なんだけど。

あたしは実はG T—Rの前にスカイラインに乗っていた。B C N R 3 3 3 っていう型のスカイライン時代のG T—R。

軽い事故を起こした赤いのを格安で買って。ソレを買うのに親の金を勝手に使って家を追い出されて。自業自得ってやつ。

しかも無免。家を追い出された事を気にせずあたしはRを乗り回していた。それが1年前。

Rにガタが来て車を乗り換える事になったけどなかなか決まらなかった。

んでこれだ！となったのがR 3 5。今度はちゃんと自分で働いて買った。とはいえ新車ではなく中古車だけだね。

過走行気味の赤いGTRを買った……のはよかったけど維持費が高い。税金だつてある。

だからあたしは働かないと終わる。

「あたしのRのエンジンを使った車に乗ってるのはどこの誰よ」

「私だよ？」

「知ってるしー」

希は自分の車を持つてる。意外と知られてない事だ。

あたしのGTRに乗ってるイメージが強いらしく、希が車を持つてると知って驚く人が多い。

彼女はシルビアに乗ってる。最後のモデルね。

彼女は某カーアクション映画で登場したモナリザ？って言われてたのに似たシルビアに乗ってる。

シルビアは元はボディだけだったらしい。彼女の実家の工場に持ってこられたそう
で彼女が17歳の頃から約1年かけて形にしたそうだ。

肝心のエンジンがないと相談された時はびっくりしたよ。その時にR35を買おう
と思つてた頃だったから。

あたしはR33を廃車にするつもりだったけど希にR33を引き取られた。そしたらシルビアにR33のエンジンが載ってるんだもん。

希が「使える物はシルビアに使うね」と言ってたがまさかあれくらいやられるとは。足回りとかも全部使われて残った物はRのボディと外装だけだったし。

でも希があまり乗らないんだよね。シルビアに。

だいたいあたしのRに乗る。彼女が自分のシルビアに乗るのはちよつとした買い物くらいなんだとか。

「んであたしのRは赤色だったのになんでピンク色になったんですかねえ」

「趣味♪」

あたしは機械に弱く、当然チューニングもできない。

希にチューニングを依頼したけどね、その際に赤色だったあたしのRがピンク色になつて帰ってきたんだよね。まさか趣味だったとは。

そんなワケでそもそもGT-Rって言うクルマで注目される。しかも派手なピンク色。

街中を走ったらイヤでも注目を浴びる。最初こそ恥ずかしかったけど慣れてしまつて今はなんとも思わなくなった。

「あれどんなピンク色なの？」

「チアフルピンクメタリック。確かスズキのスペーシアの色だよ」

「軽自動車じゃなかったっけ？」

「軽自動車だよ？カワイイって思つて」

……そんな感じで目立つGTRに乗るのがあたし。

夜、あたし達は再び首都高へ。

その日のコースはC1エリア外回りだった。

「ブレーキ踏んだ感触が気になるんだけど……」

「冷却追いついてないのかな……。今はエンドレスのキャリパーにしてたけど」

「前はなんだっけか？」

「ブレンボだったけど初期制動がダメだーって明日翔が言つて変えたんだよ」

「うーん……走らせ方なのかな」

GTRは非常に出力がある。希のチューンでパワーが大幅に向上しているのだが、それ故各部への負担も大きい。ソレを一番感じるのがブレーキだ。

バックミラーに光が入り込み、あたしは視線をバックミラーに移す。

「スープラ……」

あたしは後ろに80スープラがいる事に気づいた。

「ピンク色かー。ああいう車に乗ってみたいよ」

ボクは前のGTRのテールを見つめながら言った。

ピンク色って女の子の好きな色だからね。

GTRにああいうピンク色も悪くないんじゃないかって思うんだ。

「やるなら……っ！」

あたしはRを加速させる。すると後ろのスープラも追いかけてきた。

「希、ブースト抑えて」

「1. 4でいい？」

「そんなくらいあればいいっ」

ブースト圧を下げる。普段は1. 5 kgにセットしているが、C1エリアのようなコーナーが多い所はパワーがあまり意味ない。寧ろコーナーリングが重要になる。

「タイヤがタレてる」

「大丈夫？無理しないで」

「まっさか。諦めないよ」

あたしはバトルを続けた。タイヤくらい自分のテクでどうにかすればいい。

「上手いな……。そして車を丁寧に乗ってる」

ボクは前のGTRの動きに感心してた。

車にムリをさせない動き。これができるかと聞かれたら実際にできる人はあまりいない。

自分では気づかないけど周りから見たらはつきりと動きがわかる。

「速い！明日翔つ、インへ」

「わかってる！」

レーンチェンジしてコーナーを抜けていく。しかしそれでもスーブラは離れない。この後の区間はストレートがある。短いストレートだが引き離すのもってこい。

「明日翔、また『アレ』やろうとしてるでしょ」

「……はい」

「それで壊れても私直さないよ」

「やっぱやんない」

秘密兵器を使おうとしたが希に警告されてやめる。しかし『アレ』を使えばスーブラをチギれる。

「走らせ方でどうにかするんでしょ？」

「そうだよっ!!」

あたしは根性で攻め込んでいく。

「うっ!？」

前のG T—Rのペースが上がった。タイヤはタレてる。ブレーキもキてるのに何故攻めれるんだ。

「でも……こっちだつて負けない!」

ボクはスープラのアクセルを踏み抜く。

「明日翔、抑えて!水温がっ!」

「くっ!……でもまだやれる!」

あたしは無我夢中で運転していた。

ピンチから逆転するための切り札を使うために。

「……ごめん、やっぱやる」

「えっ!?!」

「お願い」

「……もーっ!」

希がブーストコントローラーを操作。モニターには「1.7」と表示された。これがこのRの切り札になる。

「!?!」

嘘だ。さらに加速するのか……!?!

(絶対引かない)

あたしはその考え以外頭になかった。

Rの切り札。フルブースト1.7kgの時のRの最大出力は……。

「なんだこれ……!?!」

GT-Rのテールが離れる。それも先程までとは比較にもならない速度で。

(なんなんだこれっ!?)

「推定」1000馬力。

それがあたしのRのフルパワー。

気がつくともスープラは戦意喪失したらしくスピードを落としていた。

「水温やばい……」

「明日翔のせいだよ」

「はっ」

怒られた。それ程までの大出力を持つR。

普段セットしてあるブースト圧は1.5kg。それでも750馬力を発揮する。

遡ると希があたしのRをチューンした時になる。

希が組んだVR^{エンジン}38をテストしていた。

排気量を4リッターに拡大したと言うVR38はとんでもない結果を示した。

ブースト1.5kgで750馬力。希が言うRが耐えられる最大ブーストの1.7kgにセットして行ったテストで事件は起きた。

800馬力を計測したのを最後に測定不能になってしまったのだ。

燃料の消費量から計算した理論値で『推定』で1000馬力」という結果になったのだ。

しかもこれはあくまで推定値。実際はこれよりも出ている事になる。

過剰すぎるパワー。

当然負担は大きく、ボディなど補強を入れられる所は全て補強された。

ロールケージはクロモリ？って言う素材で作られた。希が言うにはやたら硬くて重い鉄だそう。

軽量化もしたんだけどね。シートを取ったりしたんだけどボディを補強した分結局重くなった。

希によると純正ノーマルからだいたい35kg増加してるらしい。軽量化分は約105kg。ソレを帳消しにする補強が行われたワケ。

希曰く「軽くする事はできるけどこれだけのパワーだと変に軽くすると危ない」だそうだ。

そりやそうだ。彼女もこんだけの大パワー車を作るのは初めてだった。試行錯誤しながら手探りで作り上げた。彼女なりの譲れない物があつたんだと思う。

「明日翔、スープラが降りる」

スープラが降りるらしい。あたし達も降りることにした。これ以上走る事は不可能と判断したから。

下道の駐車場であたし達はお互いの顔を合わせた。

だが、あたし達は出てきた人に驚いた。

「えっ!?!えええ!?!」

「真ちゃんだー!」

「あはは……」

スープラから降りてきたのは今や知らぬ人が珍しいくらいであろう有名人。765プロダクションのアイドルである菊地真だった。

「真ちゃんはこのスープラを自分で?」

「うん。安いヤツだけどね」

「かなり手が入ってるよね」

「実測600馬力あるかな……。もう少しパワーは上げられるんだけど」

「……」で希が聞いた。

「そのスープラは『誰』がチューンを?」

真からの返答。

「父さんが。父さんも昔湾岸を走ってたって聞いてる」

あたしは真の父である菊地真一の名を知っていた。

彼はスーパーGTで長年活躍している。そしてあたしの父と関係がある。昔は彼とあたしの父は親友だったそう。でもある事があって縁は自然消滅してしまった。その話はもうちよつと後に。

「お父さんが……」

「そうだよ。お父さんに色々叩き込まれてね（笑）」

「クルマも乗れてアイドルかー。真ちゃんすごいや」

「ありがとう……。ボクとしてはもうちよい別の事で褒められたいや」

……希は真の大ファン。彼女のライブの時の希のテンションは高く、その時のテンションを初めて見た人はみんな驚く。普段とのギャップが激しいんだもん。

それで今自分の目の前に本人がいる。希にとって本当に嬉しい事だろうし。

「んじや、ボクはこれで。また走ろう」

「真ちゃんばいばい」

「今度はゆつくりと走りたいな」

あたし達は真と別れて帰った。

後日、あたしのRの修理をやった希に説教されたけど。

「懐かしいよね。あん時の希はホントキラキラしてた」

「だってー……。嬉しかったもん」

希の気持ちはよくわかる。

あたしだったら有名ドライバーに会えた時くらい嬉しいし。

例えば……岩崎選手とか。今は現役を退いてチームの監督をやってるけど。

「真ちゃんタレントとしても上手だよ。場を盛り上げるのがすごく上手」
「さすが元アイドル」

「真ちゃんは今何乗ってるのかな？」

「さあ……。さすがに『あの』スープラは乗ってないだろうし」

「だよね……。ボディが歪みきつてもう直せないって言われてたもんね」

「……まさかね」

あたしの頭にふとイメージが浮かぶ。妙にリアルなイメージ。それが現実になるかはまだわからない。

「長いなー、こんなゆっくり走ってたら日付変わる」

「大丈夫だよ、全然余裕」

法定速度で走るのものすごく久しぶり。ゆっくり過ぎて退屈になってくる。それだけスピードを出す事が多かったワケだけど。

「さて……いるよね。あの自由人は」

「……まだダメなの？」

「だってー……。付き合うとろくなことが無い」

「遥さんがいるから大丈夫だと思っようよ？」

「遥さんはすごいなー。あの自由人とよくいれるなって。あたしはゴメン」

あたし達のRはコーナーを曲がる。

次に思い出す人物は誰にも止められない自由人で天才ドライバーだ。

Memory 03 夢斗

あたしは苦手な人がいる。

人はその人を苦手と思う理由は様々あるだろう。話し方だったり、その人のやる事が自分に合わなかったり。

とにかく何かしらの理由があつて人を苦手と思うわけで。

あたしの苦手な人……星名夢斗。

彼は誰もが認める「天才」だ。しかし人を振り回す事も周囲はよく知ってる。

夢斗との出会いはとりあえず最悪の一言だった。なんであんな事になったのか今でもよくわからない。

とはいえ彼の考え方は必ず筋が通っている。無意味なんてない。

次に思い出すのはそんな天才との出会い。

あたしはたまにG T—Rで向かう所がある。
埼玉県和光市にあるとあるチューニングショップだ。

「おお、明日翔か」

「こんにちはー、圭介さん」

あたしを迎えたこの人は工藤圭介。

歴代G T—Rのチューニングを専門とするショップ「C R S」の代表を務める。

圭介さん曰くショップ名のCは「C¹」、Rは「^競レース」、Sは「^専スペシヤル」だそう
で。

直訳すると「首都高環状線で競走を専門とする」だとか。あたしは英語がダメダメな

ので希に教えてもらったけどね。

話を戻してなぜここに来たかというあたしのGTRは希がチューニングをやっている。だが、やはりR35GTRは普通の車と明らかに技術の次元が違う。

あたしが昔乗っていたR33は希がチューニングできた。しかしR35GTRは希の手にも余るような車だった。

だけど圭介さんなら歴代GTRを知り尽くしているのもあり、希の両親に紹介してもらった。

圭介さんはあたしが生まれる前に首都高で有名なGTR乗りとして名が知られたそう。2000年にこのCRSをオープンしたそう。

希でもどうにもできない部分（ECUなど）を圭介さんにセッティングしてもらおう。

圭介さんのチューンは確かな物でメカには疎いあたしでもはつきりと違うとわかる。それほどに圭介さんのチューンはGTRを変えてしまう。

「んで、今日はどんな用だ？」

「電子制御の事ちよつと見てもらいたくて。希に乗りやすさを重視した設定に変えてもらったらつて言われたんですけどさっぱりわからなくて……」

「希が？意外だな」

「ええー？そんな意外ですか？」

「ああ。希が乗りやすさを重視するって今までなかったからナ。ま、やってみるよ」

R35の調整が終わるまでの間あたしは代車を貸して貰ってる。

白いスカイラインGT-R（BNR34）。しかしこのR34は普通のR34ではない。
い。

帰り道。

R34はあたしの操作に素直に反応して左右に舞う。

「ごやー……やっぱりすいいな」

このR34は圭介さんが全てを注いだというCRSのコンプリートカーである。

通称「Kシリーズ」。新車のR34GT-RをベースにMAXパワーを500馬力程度に抑えてる。街乗りやサーキットなどあらゆる場所で走れるオールラウンダーな車だった。

このR34はKシリーズの最終モデルである「K6」。

Kシリーズの完成形とも呼べるGT-RのRBサウンドがあたしを刺す。

(なんでこんなにイイわけ!?)

(初めて乗った時もそう)

(やばい……楽しい!!)

興奮してアクセルを踏む右足に力が入る。

ぐんぐんスピードを上げるR34にシビれる。あたしが乗っていたR33でもこんな走りはできなかつた。

乗れば乗るほどあたしにシンクロしていくK6。

また乗りたいな……K6。最後に乗ったのいつだっけ……？

埼玉から帰ってきて2日後。

圭介さんからR35の調整が終わったと連絡があり、再び埼玉に向かっていた。

今回は希も一緒。セッティングの内容などを確認するためCRSにGTRを持っていたら希も一緒に行く決まりだ。

「スロットルの開度などを多少変えてみたが、俺としてはこのセッティングなら明日翔のドライビングにピッタリだろうな。繊細なアクセルコントロールで旋回、そこで発揮される操作性を明日翔がフルに生かす事を前提にしてな」

「明日翔はもつとダイレクトに踏むと思いますけど」

「だろ？ある程度余裕を持ってセッティングはしてみたが……」

「しっかりと曲げる、GT-Rの基本だろ？」

GT-Rはスカイライン時代からその弱点として車重がある。

第二世代のRB系GT-Rの最初のモデルであるR32で1400から1500kg代。

その後のRはどんどん重くなっていった。RB系GT-Rの最終モデルであるR34は1560kg（VスペックII Nur）という重さ。

その重さを帳消しにするのがエンジンが発揮する大パワーによる加速。でもパワーが上がってブレーキへの負担が大きくなり結果、曲がれなかったりタイヤがタレるなどGT-Rのパワーアップとブレーキは切っても切れない関係だ。

「そりゃそうですケド」

「G T—R もなんでもそう。しつかり曲げるための動きをドライバーが作る。それを問われるからスポーツカーがあるんだろ？」

「どんな動き方がいいかなんて確実に決められない。理想形を目指して走り込むんだ」

圭介さんの話には強い説得力がある。歴代G T—Rを見て、そして乗り続けてきたからある説得力。圭介さんはG T—Rを知り尽くしている。

「ありがとうございます」

「おう。またいつでも来いよ」

圭介さんに別れを告げてあたし達はC R Sを後にした。

その帰り道。

高速に繋がるある山道を走っていると銀色の車を見つける。

「あれって……」

「FCだね」

銀色の2代目RX-7ことFC。こんな時間に走ってる以上走り屋だと確信したあたりはFCを追う。

FCはなかなか速い。あたしは峠を走った事がないためこういう場所の走りはあまり上手くないのもあるけど。

「……すごい」

あたしはドリフトしながらコーナーを抜けていくFCに驚いていた。速い。

「明日翔、踏めないでしょ」

「うん、ブースト落として」

フルブーストが掛からないのもあり、ブースト圧を落として対処する。

それでも車重の重さから来るブレーキのタレは防げない。

苦しい状況のあたし達に迫っていたのは……

ゴッウオアアアアアアアアッ

「明日翔、後ろから来るっ」

「うっ!?!は、速いつ!」

バックミラーで後ろの車の存在を認識した瞬間にはもうその車達はあたし達の前に出ていた。

銀色のエボX、黄色いFD、青いインプレッサの3台があたし達と前のFCをぶち抜

いていった。

特にエボXが群を抜いて速く、大胆な動きを見せながらも圧倒的なスピードで走り抜けていくその姿はあたしに衝撃を与えた。

わかりやすい程大きく車体を振り出してコーナーに入るエボの動きはラリーの動きそのもの。

完全に戦意喪失したあたしはアクセルを緩めた……。

山道を抜けた後に立ち寄った駐車場に先程追っていたFCが止まっていた。

「さっきのGTRのドライバーかい？」

後ろから声をかけられ、びっくりして振り返ると若い男が立っていた。あたし達よりも少し年上に見える。

「そうですけど……」

「上手いと思うよ。……あのFDとかは別格だったけど」

「あたしは峠とか走った事ないので……自信ないですよ」

「いや、自信持っていていいと思うよ。あの道を走り込んでるオレから見てもイイ走りだと
思ったよ」

「あの、あなたは……?」

「オレは元木明彦。学生だ」

明彦というその人のFCが気になっているらしく希が聞いた。

「このFCってどうしたんですか?」

「ああ、このFCは15万で買ったボロだけどね。コツコツ直して今の形になってるさ。
なんか知らないけどシューマンって友達から呼ばれてるよ」

「誰……?」

「君達はあの3台を知っているのか?」

「いえ……」

今でこそわかるのだが当時はまるでわからなかった。首都高を走り込んでいるのに

なぜわからなかったのか。今でもわからない。

「あたし達そろそろ行かないと……」

「そうか……。楽しかったよ。またいつか走ろう」

「はい！」

明彦さんと別れ、東京へ向かう。

数日後。

希と一緒に買い物したあたしは帰る途中に困った様子の人を見つける。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ……すいません。車の鍵落としたみたいで」

車の鍵を落として困っているのは女の人だった。あたし達より少し年上に見えた。

「車ってなんですか？」

希が聞く。希は車種さえわかれば車の鍵を探せるのだ。

「インプレッサです。GDBの」

「インプレッサですか……。あつ、それならたぶんさつき見たかも！」

「本当ですか!？」

先程歩いてる途中に公園のベンチで休憩したのだが、ベンチに鍵が置いてあった。

「SUBARU」と刻印されていた鍵が。

「取りに行きますね！」

「あつ、私も行きます!!」

5分後。

公園のベンチには鍵がそのまま置かれており、その女性のインプレッサの鍵である事がわかった。

「よかった……」

「すみません、迷惑かけて」

「いえいえ！お気になさらず！」

インプレッサを置いてある駐車場まで一緒に歩くあたし達。

あたし達がG T—Rを駐車場に置いていく際にインプレッサを見たのでそのインプレッサが女性の車だろうと思った。

「インプレッサ好きなんですか？」

「ええ。両親がスバリストで私もその影響で」

「あたしの親は昔車好きだったんですけどあたしがちよつとやらかして。勝手にR33のG T—Rを買って」

「それは怒られますよ……」

女性にも呆れられた。そりやそうだけどね。

駐車場に到着した。だがあたし達を待っていたのはインプレッサを盗難しようとしてる外国人の窃盗団の男達3人だった。

「ああっ……!!?」

男達があたし達に気づき、逃げようとする。

「待ちなさい!」

あたしが追いかけてしようとすると……。

「逃がさねーぞ、コラ」

あたし達の後ろから突然男が飛び出してきた。窃盗団の男達に向かっていく。

飛び出してきた男に窃盗団の男の一人が突っかった。しかし。

窃盗団の男は飛び出してきた男に肋骨と顎のあたりを掴まれてそのまま首を真上に押し上げられ……。

ゴキリッ

窃盗団の男はその場に崩れ落ちる。

首はありえない曲がり方をしており、首の骨を折られて絶命してるのがわかった。

その光景を見てもう一人が飛び出した男に向かっていく。その手にはギラリと銀色に光るナイフが。

しかし窃盗団の男は腕を固められて逆にナイフを奪われる。

「うおらあああつ」

ナイフを奪った男は窃盗団の男の胸にナイフを思い切り突き立てた。窃盗団の男の胸からは赤い血が流れる。窃盗団の男はナイフを引き抜こうと抵抗しようとしたが……。

ナイフを突き刺した男はナイフでそのまま胸を切り裂いた。

窃盗団の男は血を流しながらその場に倒れた。ピクリとも動かなくなり、即死は確かだった。

残った窃盗団の男がナイフを持っていた男に拳銃を向けた。

今度こそその男が殺される。誰もがそう思った。

だが男はものすごい速さで走って窃盗団の男に詰め寄り、拳銃を持っていた右手を叩き落とす。そしてそのまま窃盗団の男を一本背負い。

アスファルトの地面に叩きつけられて痛みで動けない窃盗団の男。
そしてその男は地面に落ちた拳銃を拾い上げて……。

ガチャ、キンツ。

拳銃の上部がスライドして射撃準備が完了した。

そのいつでも撃てる状態の拳銃を窃盗団の男に向ける。

男の行動を呆然と見ていたあたし達もようやく状況を理解した。

「銃はダメでしょ!?!」

窃盗団の男も英語でなにか言っていた。たぶん、命乞いをしていたのだろう。

「……じゃあな」

パンツ、パンツ

その瞬間、拳銃が大きな音を立てた。銃口からは煙が出ていた。同時に葉莖が2つ落ち、地面に落ちて金属音を響かせた。

窃盗団の男の頭には穴が空いていた。血溜まりを作ってその中に倒れる男。後に教えて貰ったのだが、男がやったのは「ダブルタップ」と呼ばれる相当な高等技術。

同じ目標に弾を2発撃ち込む『確実に目標を殺すための』技術だそうだ。男は拳銃を投げ捨てる。

「あ……ああ……」

希が恐怖で震えている。あたしも男がやった事に恐怖を感じ足が動かなくなっていた。

「夢斗……！何をやって!!」

女性が男に詰め寄る。

「遙……お前のインプがパクられようとしてたんだぞ」

「それでも殺す事はないでしょう!？」

窃盗団の男達は全員死んでいた。

「あんな……どつちがいいんだ？」

「……？」

発言を飲み込めていない女性は直後男に詰め寄られた。

「お前の大切なモンとその大切なモンを奪おうとするクソ共の命。お前はどつちを取るんだ？」

「人の思い出や人生が詰まった物をお前はあっさりとくれてやるってか!？」

男の発言からは窃盗団への相当な憎悪が見て取れた。

「……私が大切にする物を選びます」

男の気迫に負けた女性が諦めたように言う。その様子はもはや脅しにしか見えなかった。

「でも……先程までの事を見られでもしたら」

「そんな心配いらねえよ。ホレ」

男が指した方向には防犯カメラがあった。しかしカメラのレンズの前に板が置かれており、カメラが無意味になっていた。窃盗団の男達の仕業だろう。

「拳銃とかは処分するからいいけどさ」

「あんた、誰よ」

女性の知り合いなのはわかった。しかしあの行動や言い方はないだろう。

ムカついたあたしは男に聞く。

「俺？星名夢斗」

「……星名？あれ？どこかで聞いた事がある」

「明日翔、全関東学生ジムカーナ選手権の……！」

「……T大の大物ルーキーか。んで、D1に出てた……『銀色の革命者』」

「その名前でまず呼ばれねーけどな」

「んで、アンタらはなんだ？遥の知り合いか？」

「遥……さん？」

「え、知らねえの？」

「だってあたし達はさつき会ったばかりで……。遥さん？が鍵落としたから手伝っただけ……」

「……なあ遥。結局遥のせいじゃね？」

「はい……。えと、今更ですけど瀬戸遥と言います。アイドル達のプロデューサーをやっています」

「できる人オーラがあつたけど本当にできる人だった……」

あたしから見たら遥さんは先生みたいで。

「いやいや、遥はけっこうなドジ踏むぞ」

「嘘でしょ、そんな」

そう言ったあたしが遥さんの方を向くと目を逸らされた。

「……でも、しっかりとしてるでしょう!？」

「しっかりとしてる。空回りひでえけど」

「なあ、聞いていいか？あの35ってアンタらのか？」

夢斗が指さした方向にあるあたし達のピンク色のGTR。

「そうだけど」

「ハデだなーって思ってた。んでさ、ちよつと前に埼玉いたら」

「なぜ知ってるの？」

「峠を走ってないってわかるし。ヘツタクソ」

「夢斗！そんな言い方はないでしょう!？」

「遙の方が上手かったぞ。インプの足首都高でもいいし峠でもいいってスゲーな」

「……あれ。まさか」

「そのまさかじゃ……」

あたし達はひとつの可能性にたどり着いた。

「あの日のインプレッサって遙さんの!？」

遙さんは頷いた。

「夢斗の気晴らしに付き合ってたんですよ。わざわざ埼玉まで行くって聞いた時はびっくりしましたよ。銀色のエボが夢斗の車です」

それを聞いた途端あたしの中で雷が落ちたような衝撃が走る。

あれ程の速さを見せたあのエボXのドライバーがこの男だったとは。

「……絶対勝つ」

「はっ..」

「首都高で会ったら絶対に勝つんだからー!!」

子供みたいに喚くあたし。そんなあたしを見て夢斗達は「めんどくさい」って思っただろう。

「そういえばあのFDって？」

遥さんがインプレッサ、夢斗がエボX。ならあの黄色いFDは一体誰が乗っているのか。

疑問を夢斗にぶつけると……。

「たぶん近いうちに会うさ。アスカが本気で首都高を走ったらな」

「ちよ、呼び捨て……」

「俺は2年だ。アスカは1年だろ？」

「うう……納得いかない。あと1年早く生まれたかった」

「明日翔さん、夢斗は誰に対してもこんな感じなので気にしたら負けですよ」

「……結局かー」

遥さんを見送った後にあたしは夢斗が乗る銀色のエボXを見た。

「いつでも相手になる」そう言わんばかりの表情をしていた夢斗を負かしたいと思った。

「アイツは変わってないしな……」

「なんで明日翔はそこまで相性が悪いんだろうね（笑）」

「知らないよ」

「遥さんはなんで夢斗と息が合うんだろ？」

「さあ？でも息が合わなきや夢斗君とコンビでラリーできないじゃん」

「だけどさー。あの変人は周りに迷惑かける割に前に立って引っ張るような感じじゃん。リーダーには向いてないよね」

「でも遥さんはそういうのがわかってるから夢斗君と結婚に踏み切れたと思うよ」
「あたしも結婚相手をちゃんと考えよ……」

「さて……ちよつと踏んでみちやう？」

「いいね。……オールクリア」

G T—Rは凄まじい爆音と共に加速。目的地まで速く着きそうだ。

猛スピードで駆け抜ける黄色い車……。今も健在だろうか。

次に思い出すのは流星のように首都高を走り抜けた男と……。あたしの憧れ。

Memory 04 蓮

「明日翔、帰国直後だっけ？小日向さんは」

「小日向さんも美世さんも帰国したばっかりだっけって言った。すごいよね、DTMとかいろんなレースに出たと言ってたけど」

「小日向さんは車を丁寧に走らせるし速いし……。憧れるんだ」

「んで2人はアメリカのストリートレース界でスター的存在って……。映画かな？」
「だね。でも……。本当に映画みたいだね。出会いは」

次に思い出したのはある意味全てのはじまりである人達。

皆が2人と出会い……。今日に至る。

夢斗達に会って一週間後。

バイトを終わしていつものようにアパートに帰る。

「ん……？何これ」

あたしの部屋の扉の前に置かれている荷物。あたしの部屋に入れていた家具なんですけど。

「やーっと来たかい」

「げっ」

振り向くとアパートを管理する大家さんが立っていた。

「あんた、こっから出ていってもらうよ」

「はあ!!おかしいでしょ!?!」

「その台詞はこっちが言いたいっ!!あんた、家賃を2ヶ月滞納とはいい度胸してるじゃないか」

あたしはバイトでの給料を普段の生活費に回していた。だが当然バイト代では足りなくなり2ヶ月前から家賃を払えず、大家さんに待ってもらっていた。

……とうとう限界だった。あたしは必死に大家さんにせがむも……。

「あんたが何してるかは知らん。けどあんたの事はウチには関係ないだろう」

「住む所なくなるんですよ!？」

「あんたがどうなるうとウチは知ったこっちゃない」

「そんなあ! 待っててくださいよ!!」

「全部あんたが悪いんだからね」

「うるせえぞ!」

びつくりしてあたしの部屋の方を見ると知らない男の人が。

「す、すみません……」

「やっとなわかったかい。彼は部屋の新しい住人だ」

なんとか家具をG T—Rに詰め込んだ後。

静かなGT-Rの車内でこれからどうするか考えていた。が、ちよつと浮かんだらすぐに考えは消えてしまう。

やがて自分の今までの行動が頭に浮かぶ。こうなってしまった理由をあたしに突きつけるように。

「お前は出ていけ。勝手な事をするお前は助ける気もならん」

「一人で生きるのがどれだけ大変か身をもって知れ」

家を追い出される直前の親父の言葉があたしに突き刺さる。あの頃は親という「檻」があった。あたしは檻の中で過ごす「鳥」だった。

檻から放たれたあたしはたった一人で生きる事の辛さを知った。

あたしの親はなんで……あんな風になってしまったんだろう。親父の親友の菊地真一さんがレーサーになる前後には今の厳しい感じになってしまった。なぜ車を嫌うようになったんだろう。

「……あつ」

あたしはあるアイデアを思いつく。ただしそれは希次第で成功かどうか決まる。

僅かな希望と大きな不安を胸にスマホに登録されている連絡先リストをスクロール。
「柗木希」の名前はあつた。震える指で発信ボタンを押す。

「……もしもし」

「明日翔？どうしたの」

「あたし……アパートを追い出されちゃった。行くあてがなくて……」

「ええっ!?!」

「希に頼みがある。あたしを希の家にしばらく居させてほしいの。バカな事言ってるっ

てあたしでも思ってる。突然だし、あたしの自業自得だし」

「希の言うことは必ず守る。言われた事なんでもやる。だから……」

「いいよ」

「えっ?」

希の返事はすぐに返ってきた。あまりにも呆気なくOKと。

「私の部屋1人で使うには大きいし。それに私1人だと家事が大変で」

「えっ、でもあたし家事は自信ないよ」

「明日翔ができる事を私が教えるから。明日翔ができる事をしっかりやってくれば文句なんて言わない」

ああ、神様。女神って本当にいたんだね。

「とりあえず……私の家まで来れる?」

「あ、うん。大丈夫」

電話が終わった後、人生で一番深いだろうため息をついた。

「……………どうしようかな」

希の家に居させてもらえると云つてもあくまで居候の身。なるべく早くあたしの居場所を探さないと希に負担をかけてしまう。

それにあたしは現在住所不定。しかも掛け持ちしていたバイトは現在1つだけになつていた。

学校の出席日数の不足を考慮してコンビニでのバイトを辞めたのだ。まだ辞めていないガソリンスタンドのバイトも店長や他の店員との関係が悪く、正直辞めたい。働かないといけなければいけれどもそもそも今生きるのすら苦しい状況でどうしろと。

(行くか……)

G T R を走らせて都心へ向かう。目指すのは希の家であるマンション。都内のマンションでは比較的新しめのマンションだ。

マンションそのものはあまり大きくない。

けど一部の部屋の住人専用のガレージが隣接しており、希は自分の持つシルビアをメ

ンテできる。

聞けば希が大学に入る際に実家を出て一人暮らしすると父親に言ったら希の父親がガレージ付きのマンションを見つけてくれたらしい。

また、広い部屋にしてくれたそうで希一人ではちよつと余るくらい広い2LDKだとか。でかい。

20分くらいGTRで走って希の家に着。希の部屋は3階の端っこの方にある。

ピンポーン

「明日翔！」

あたしを迎えてくれた希は笑顔。嫌な顔一つせずに迎えてくれるとかマジ女神。

「……大変だね」

苦笑しながらあたしの話を聞いてくれた希。今まで体験した事の無い苦勞。そんな事を希に話すと苦勞はどっかに飛んでいくようだった。

「とりあえず明日翔を一人にしたら何かあるかわからないし。私の家にいながら考えてもいいんじゃない？」

「とりあえず……明日翔の部屋は作っておいたからそこに荷物とか置いて。G T—Rの部品はガレージに置いて」

希に言われた通りに荷物を持っていく。

部屋は整頓されていてあたしが住んでたアパートの部屋とは大違い。これはあたしが片付けられないからだけだ。さっすがあたし！女子力皆無！（自虐）

あたしのG T—Rは希のシルビアと一緒に置かれる事になった。

屋根付きで空調完備。住人個人で使えるガレージとしてはあまりにも贅沢だ。これならG T—Rを青空駐車する事もないのが個人的に嬉しかった。

「とりあえず、明日翔にやってもらいたい事を教えるね」

あたしは希に家事のやり方や担当する事を教えられた。

女子力皆無でそもそも家事もできないあたしにとつて1から教えて貰えるのが大きかった。手先が不器用なあたしのできる事はちよつとだったけど。

あたしが希の家に居候し始めて3日後。なんだかんだであたしのこれからの見通しは立った。

あたしはバイトを完全に辞める事にした。んで希がG T | Rに関わる事を全部やってくれるそうだ。あたしはG T | Rの整備代の計算で困った時は希にそういうのをやってもらつてたからコレはありがたい。希のできることも多すぎない？

その代わりあたしは希のメンテ作業の手伝いを必ずやる事になった。でもそれでよ

かった。

希のメンテ作業を手伝って希に車のメカ部分を教えて貰えたからだ。

少しでも自分の乗る車を深く知ろうとあたしは一生懸命に希のサポートをした。

あたしはバイトを辞めた後どうやって金銭面を工面したかと言うと希頼りだった。希に「お小遣い」としてある程度お金をもらっていた。そのお小遣いは希のお手伝い分としての報酬みたいな物だった。……うん、やっぱりあたし普通じゃなかったな。居候先の人に全部支えてもらうって。

希の家に居候してあつという間に2週間。その日はGTRで環状線を走っていた。以前希に依頼していたGTRのギア比の変更後のテスト走行を行っていた。

6速を純正の0.796から最高速アタック用に0.709に変更した。これに加えてフルブースト時の負荷に耐えられるように2、4、6速ギアを強化品に変更した。

GT-RのミッションであるDCTは奇数段(1・3・5・R)と偶数段(2・4・6)それぞれの変速系統を専用クラッチで交互に切り替えて変速している。しかしその構造上クラッチへの負担は大きくクラッチ周りの不具合が多いと希や圭介さんから教えられた。

GT-Rのスペシャリストである圭介さん曰く初期型のR35GT-Rはクラッチの中の部品であるオイルシールって部品が欠損する事でギアチェンジ不能になるトラブルがあると言う。ただし初期生産ロット内の稀な不具合らしく全てのGT-Rに当てはまるわけではないらしいけど。

そういう事までしっかりと把握している希や圭介さんって本当にGT-Rを知り尽くしていたんだと今改めて思ってる。

話を戻すと変更されてギア比でGT-Rがどう変わったかを確かめていたあたし達。希によると6速で7000回転回って計算上時速352km出るというセッティングだった。

しかし超高速エリア湾岸線ならその効果をはっきり体感できただろうけどその時走っていたのは曲がりくねったコーナーが多い環状線。速度を乗せれずに悪戦苦闘し

ていた。

その時あたしは早く湾岸の方に出たいと思っていた。

でも……その時C1を走っていなかったら出会えなかった。

「エンジン自体変わったんじやって思うくらいだ」

大パワーを発揮するGT-Rの心臓部VR38。アクセルを踏めばもりもり下からトルクが出るタイプのエンジンであるVR38で「踏めない」。

排気量拡大を行った4リッター仕様のVR38を生かせないなんて当時のあたしにとつてシヨックだった。

軽く気持ちちが沈んだあたしを呼ぶ希の声が聞こえた。

「明日翔つ、前！」

希の声に従って前を見ると紅いGT-Rがスピンのたらしくこちらの方を向いているのが見えた。

「やっぱ、助けないと……!」

あたし達はG T—Rを降りて紅いG T—Rの元へ。

「大丈夫ですか!？」

紅いG T—Rのドライバーは女性だった。左腕は包帯が巻かれており、左足はなんかゴツそうな物が着いていた。今のあたしならわかるが当時のあたしはそれがギブスななんてわからなかった。

どうやら痛みを感じるらしい女性を希と2人がかりで降ろす。

「病院に運ばないと……!」

あたしは女性をあたし達のG T—Rに乗せた。希にあたしのG T—Rの運転を頼み、あたしは女性のG T—Rを動かす事にした。

事情を理解したらしく女性はあたしにキーを渡した。

「ごめんね……巻き込んで。……うっ」

痛みで苦しげな女性を一刻も早く運ぶべくあたし達は走り出す。

走り始めて数分後。

明日翔のGT—Rを運転する希に女性が聞く。

「この35Rって……君が作ったの？」

「はい。私がエンジンとか全部」

「エンジンも……。すごいなー。見たところ君はあたしよりも若いみたいだけど……」

「19歳ですよ。私も明日翔も」

「明日翔？」

「今あなたのR34を運転してる子です。私の幼馴染でこのGT—Rの持ち主です」

「私は車を仕上げる事はできるけど車を上手く走らせられない。けど、明日翔は車を誰よりも上手く走らせる事ができるんです。……車の事はほとんど私任せですけどね」

「君の言う通りみたいだね」

「えっ？」

「初めて乗るハズのあたしのR34を……あれだけ上手く乗れてるんだもの。GT—R

の『走り』を知り尽くしてみたい」

「明日翔はG T—Rしか知らないってのもあるんですけどね」

紅いR34の車内。

あたしは初めて乗る他人のG T—Rに気持ちの昂りを感じていた。

(この感じ……K6に似ている……?)

(K6とは違う……ハズなのに)

(本気の作りなのに走る楽しさを見失わない)

(そして感じる……。『本物』だって)

圭介さんのトコのK6GT-Rとは全く異なる車。なのにあたしはどこかK6に似たこのGT-Rの雰囲気と安心感を感じていた。

だがK6とは明らかに異なるモノ。「本物感」だ。

K6も煮詰められたセッティングで走りに妥協がない。しかしこの紅いGT-Rは快適性などを完全に無視した「走り」に全てを振った車だとわかる。エアコンとかを外したとかそういう物とはまた違うレベルの。

まるで競う事だけを狙ったような。その為の足回りやエアロパーツ。そんな競う走りの中で「走る楽しさ」を見出していくかのような……。

「このGT-R……何馬力出てるんだろ？あたしのR33より明らかにパワー出てるし……。K6以上だよな」

K6GT-Rは500馬力くらいだったような気が。ならこのGT-Rは何馬力なんだ。多分あたしのGT-Rの普段の出力と大きな差はない……？

湾岸線に入る。

あたしはこのG T | Rで踏んでみたかった。そう思った時には体が動いていた。

(フルスロットル……ッ！)

アクセルを床まで踏み抜かんばかりに踏み込む。

G T | R……スカイラインG T | RはあたしのG T | Rとはまた違うエンジン^Rサウンド^Bを響かせた。

あたしの乗っていたR 3 3 G T | R以来のR Bサウンドがあたしに馴染んでいく。荒っぽい音があたしの感覚を研ぎ澄ませていく。

「踏んだっ!!」

「明日翔、自分の車じゃないでしょ!？」

急激にスピードを上げていくR34。丸いテールランプが希達から遠ざかる。

「……もーっ！怖いからあまり踏みたくないのに!」

希は観念したかのようにブーストコントロールを操作。ブースト1.7kgで推定1000馬力を叩き出すモンスターGT-Rが咆哮する。

「何馬力出てるんだ……!?!」

女性には驚いた表情だ。無理もない。公道で1000馬力の車なんて乗りこなせる物ではない。

「今の状態でたぶん1000馬力ですね」

希が軽く顔に緊張を見せる。確かにこのRを作り上げたのは自分。しかし乗るのは

明日翔。このRで限界まで攻められるのは明日翔だけだ。

「1000……本当に1000馬力なんて存在したんだ……」

「どういう事ですか？」

「あたしはかつてあるGT-Rをチューンしたの。持ち主は全盛期時には1200馬力出たって言うてね。さすがにやりすぎだなって思って。車への負担も考慮してあたしがセッティングし直して……あのRBは800馬力くらいに落とす。NOSも使ってギリギリ900馬力ちよいだったけど」

「なんか……すごいですね」

「でも常に使える訳じゃなかった。けど……あの35Rは本当に出てる」

「あなたは一体何をしてるんですか？」

希は聞く。自分もそうだがそんな車を作るなんてまず普通はしない。希のシルビア自分でも約500馬力といったところ。女性は自分達のGT-R以上のパワーを持った車に手を入れた。チューナークラスの知識量がないとそんな事は決してできない。

「アイドルの端くれだよ。今は全然仕事してないけどね」

苦笑いしながら女性は自身の左足を見ていた。女性は怪我で仕事ができないと希は悟った。

「そして……首都高ランナー。憧れを追うためにあたしは来たから」
そう語った女性の横顔にはまだ諦めないという意志の強さが見えた。

首都高を降りて病院前に到着したあたし達。あたしは希と協力して女性を車から降ろす。

「美世さん！一体どうしてここに!？」

声のした方向には黄色いRX-7と男が。何故か真そっくりで可愛さがある顔立ちの男はこっちに走ってきた。

「勝手に出歩いちゃダメですよ！」

「ごめん。でも……」

「君達が美世さんを？」

「あ、はい」

美世と言うらしい女性をここまで連れてきたのか聞かれる。

「その人のRがスピンしてて」

「ねえ……明日翔。美世つてもしかして……」

「え……？ いやいやまさか……」

「原田美世さん……？」

「あ、あたしの事知ってるんだ」

女性、もとい美世さんの言葉が本当である事をあたし達は痛感する。

彼女は「紅のシンデレラガール」と呼ばれる首都高トップクラスの首都高ランナー。346プロのアイドルでもあり、そして去年の春にスーパーGTのGT500クラスでモチュールのドライバーとしてデビューした。

あたしは彼女の活躍に度肝を抜かれた事がきっかけでサーキットを駆ける赤いGT—Rのような真つ赤なGT—Rを買う事を決めたほど。

「あ、そういえばそのRX—7って……この間埼玉で見た」

あたしは美世さんと話していた男の車だろうRX—7を少し前にCRSからの帰り道に見た事を思い出す。

あの夢斗自由人のインパクトが強くてあまり目立っていなかったが、このRX—7も相当速

かった。

そして美世さんと対等に話している。只者なわけが無い。

「僕は346プロのプロデューサーの小日向蓮って言います。……美世さんと同じくレーサーをやってます。あんまり目立たないけどね」

「あの……すみません、聞いた事ないです」

希が申し訳なきように言う。あたしも知らない。

「あ、でもチームわかれば多分出るかも……」

チームとか何かしらわかれば多分わかる。そう思ったあたしは聞いた。

「『D—LINE』。僕はスーパー耐久に出てるんだ。監督は片桐マサキさん」

「ちよつ……えええええ!?!」

とんでもない名前が出てきた。日本のモータースポーツ黄金期に大活躍した「ミス

ターGT」なのだ。そんなビッグゲームが出てくるなんて思ってたなかった。

「いつか君達のGT—Rと走ってみたい。夢斗君も交えて」

「知ってるんですか？」

「ああ、夢斗君は……って。君達も知ってるのかい？」

「あー……色々あって」

「夢斗君は常識に囚われないんだよ。けど、ああ見えて結構努力家なんだよ」

「美世さん連れてきてくれてありがとうね」

小日向蓮さんと美世さんと別れてあたし達は帰る。

しかし美世さんと小日向さんの印象の強さが残ってた。シビれるくらいに。

後日、街中で夢斗に出会い小日向さんと会った事を話した。夢斗はまるで知ってた風に言ってくるモンだから夢斗の足を踏みたいって思うくらいにはイラツと来た。

でも夢斗は小日向さんの事を本当にレベルの高い人と言っていてこの自由人が認める走りをするんだと思つた。

「^{ストリート}首都高でトップに立ち、世界に挑んで……今はトヨタのドライバー」

「2人ともトヨタでル・マン24時間レースに出場してもう運命かなにかだよ。そして3連覇かつ3年連続のワンツーフイニッシュが懸かっているなんて……」

「希、小日向さん達は2連覇の時が初参戦だから」

「あ、小日向さん達にとっては2連覇目を目指す事になるんだ……」

「小日向さんは何回か帰ってきてるって言うけど美世さんが帰ってきたなんて聞いた事ないや」

「美世さんは1回も帰ってきてないんじゃないや?」

「あー、ありえる」

帰ってくる……か。

あたしの脳には娘の車スリーパーと同じ色の車の前で話をしてくれた菊地真一の姿が浮かんで
いた。

Memory 05 未知

「小日向さんや美世さんはもう時速300kmは当たり前なんだよね？」

「そりやそうじゃん。それ言ったらあたし達の方が日常的に……」

「それは普通に言っちゃダメかも」

「そだね」

「でも……普通じゃなかった。誰もやらなかった事をやろうとしていた人だった」

「その目標をステップアップしてレーサーになった……明日翔も同じじゃん」

次に思い出すのは当時の首都高を見てきた菊地真一。真の父である彼の語った事は「あの日」に繋がっている。

ある日街中で真と会ったあたし達。超有名人である真と普通に接していたのは今考えるとヤバいと思う。……希は心の底から嬉しそうだったけどね。

「真、聞いていい?」

あたしは聞いてみる。真の父親である菊地真一の事についてだ。

「父さんがレーサーになったワケ?……スピードが男のロマンって言ってたなあ……。ボクも影響受けたし」

「でも……ボクがスープラで走ってるのは父さんがあるな。父さんもスープラに乗っていて首都高を走ってたって聞いたんだ」

「スープラに!?!」

菊地真一の娘である真の口から飛び出した事はなんと菊地真一も首都高ランナーだったと言うこと。

「真ちゃんは何ぞスープラに?」

希が聞く。あたしはたぶん父の影響だと思ったけど実際返答はそんな感じだった。

「父さんに会いたいなら今会えるけど……」

「本当に!？」

あたしは思わず真の手を握っていた。真はびっくりしながらもあたし達をある場所に連れていく。

数十分後、真の家に到着する。真の家はごく普通の一軒家だ。家の近くには倉庫がある。

「父さーん、いる?！」

真が玄関から父を呼ぶ。しかし返事はない。

「あれ、おかしいな。ずっと家にいたのに……」

真が頭を掻く横であたし達は玄関に飾られていた1枚の写真に釘付けになっていた。

「これって……」

「真ちゃん……と若い頃の真ちゃんのお父さん？」

真の母であろう女性に抱き抱えられた黒髪の少女と真に似た男性が収められた写真が。そして3人の後ろには黒いJZA70<sup>スー
プラ</sup>。

「これが……スープラ？」

「うーん、明日翔は見た事ないのかもね。昔のスープラはリトラだし」

「ああ、それは昔撮った写真なんだって。……その直後にスープラは壊れてしまったけどね」

「父さんが入院する前に……スープラが写った最後の写真だって」

真が告げた事は衝撃的だった。

「真、誰か来てるのか？」

「父さん、おかえり！」

玄関の向こうに見える日産マーチ。当たり前のように街中を走っている車には不釣り合いな男性が。

「君は……如月の娘か」

「そうです。如月明日翔です」

あたしを見て誰かすぐにわかったらしい。彼はあたし達を茶の間に連れていく。

「……こんなしかないがいいかい？」

「あ、ありがとうございます」

真一さんがお茶を持ってきてくれた。あたしは遠慮がちにお茶をすすってから話を切り出す。

「真一さん、あなたはあたしの親父の事を知っているんですね。……教えてください、親父がどうしてあんなってしまったのか」

「……あのR35は君の車かい？」

「そうです」

「なら、話は早いな。ついてきてくれ」

真一さんの後に続く。彼が向かったのはここに来た時に見えた倉庫。

サビが目立つ扉を開けるとガラクタが積み上げられていた。「それ」はガラクタの山の中に……。

「これが俺の車だったモノだ」

グシャグシャに壊れ、原型を保っていない黒い鉄クズ。

フロント部分であったのであろう部分に付いていたトヨタのエンブレムであたしは「それ」がスープラであった事を確信した。

「真も聞いてくれ。こればかりは話さないといけないと思っていったんだ」

真剣な表情で彼は話し始めた……。

俺は今から20年以上前に首都高を走っていた。

その頃は下道をツルんで走る奴の方が多かった。で、それに飽きた奴が首都高を攻めるようになったんだ。

当時としては峠なんて優しいくらいに要求される技術のレベルが非常に高く、失敗すれば死ぬ。そんな認識であるような場所だった。

川を埋め立てたりして完成した道。地形をそのまま形にした事で大小様々なコーナ―が生まれ、その多さが「首都高」の難しさを助長したんだ。

俺は仲間達と走ってたがそいつらはいつの間にか首都高を降りていたんだ。

仲間達は「命を無駄にしたくない」って言っていた。当たり前だ。けど俺はやめなかつた。

ミスって車を潰しても懲りずにまた走り出す。病気だったよ、俺は。

如月と会ったのは俺が首都高を走り始めて約半年の時か。

その頃俺は首都高で誰も達成できてない「時速300km」を狙っていた。

それを達成するために選んだ場所が超高速エリア湾岸線だった。

その頃湾岸で打ち立てられた記録レコードは270km代。それもポルシェとかがな。

俺は国産車で、外車共もできてない事をやってやろうと思ったんだ。

如月は……スカイラインに乗っていた。ピカピカのR31に乗って俺に張り合ってきたっけな。

張り合ってくるけど走りは確かだったよ。セダンでよく追ってきたもんだと感心し

てた。

俺は発売されたばかりのスープラを買った。んでチューニングを依頼したんだ。その時に会ったのがRGOの大田やYMスピードの山本、そして北見淳だった。

今でこそRGOなど有名になったがその時に公道時速300kmなんて誰もやった事がない。ノウハウだってロクにない。手探りでやってくしかなかった。それでもスープラを仕上げてくれた皆には感謝するしかなかった。

スープラを受け取るちょっと前に山本が教えてくれたんだが実は俺のように本気で公道300kmを達成しようとした男がいたそう^だ。

偶然にも車はスープラの先代の車であるセリカX^{ダブルエックス}X^〇。だがそれを達成する前に彼は事故であっけなく死んでしまったと。

山本は言った。

「生きて帰ってくるんだ。もう彼のような人を増やしてはいけないからね」

やがて完成したスープラを早速湾岸で走らせた。

250kmオーバーからの安定感は悪くなかった。踏んでいける。そう思った。このスープラならやれると。

「5速が伸びにくい……」

それでもすぐには300kmオーバーはできなかつた。何度も何度もセッティングを繰り返した。気が遠くなるような作業。

それでも諦めずに俺はスープラと走り続けた。

そしてスープラを買って4ヶ月後のある日。

(一般車が少ない……今なら行けるかッ)

ブーストを限界まで上げ、スープラを前に走らせる。
流れは悪くなかった。最高速アタックにはベストな状態。

今しかない。そう思っていた。

(280 km……まだだ)

スピードメーターの針が280 kmを指し。

(288……290……あと……10 km)

極限まで張り詰めた集中力。手汗が吹き出し心拍数が跳ね上がり、自分でもはつきりわかるくらい心臓の音が聞こえる。

ギリギリのスリルが俺の意識を支配していた。

そして。

(時速……300キロ……ッ!!)

スピードメーターは300kmを指した。それでも加速は終わらない。

(314km……!!嘘じゃないよな!?)

314km。それがスープラの叩き出した記録だった。

次の日には走り屋中にこの話は一気に広まり、俺は一躍注目を浴びた。如月にも話した。だが。

「お前は……バカだ」

如月の一言をその時の俺は褒め言葉と受け取っていた。だが如月が本気で俺を哀れな目で見ていた事をその時の俺は気づいていなかった。熱に浮かされたように俺は慢心があつたのかもしれない。

その後、真が無事に生まれた。それもあり家族写真を撮ろうと提案した。笑顔で写真に写った俺達。しかしその直後にその幸せは崩れる事になってしまった。

その日、俺は再び湾岸へ。

再度セッティングし直し、よりパワーアップしたスープラ。行けると俺は確信していた。

俺は如月の目の前で300kmを出すと決めた。本当に俺がやってやったと見せつけてやると。

神奈川方面へ向かい、雰囲気組の車や一般車を避けてゆっくりとスピードを乗せていく。

3車線をいっぱい使ってコーナリングスピードを稼ぎ、全開で立ち上がる。ブーストのタレはなかった。完璧な状態で行ける。そう思っていた。

(踏め—————っ!!)

スープラはあの時のように加速、時速290kmへ。

以前のセッティングからコンマ2秒程早く300kmに突入していった。

この時点でスープラは306km出ていた。

直後、スープラの右リアタイヤに異変が起きた。

突然グリップを失いオーバーステアに陥りそうになる。

慌ててカウンターを当てたがそれがいけなかった。いや……もうそうだった時点で

どうしようもなかったんだろう。

カウンターで姿勢を乱したスープラは俺のコントロールド下から離れて暴れだした。もう修正も出来ずにスープラの動きに振り回された。

俺の意識が残っていた時に最後に見た物は如月のR31だった。

次の瞬間、ドンって感じとは明らかに異質な感じの衝撃が俺を叩いた。何回か同じような衝撃が俺を攻撃した。

衝撃で意識が霞んでいく中で俺は不意に浮遊感を感じて地平がひっくり返っている事に気づいた。

スープラが止まった後、俺は走馬灯を見たんだろうな。真の顔が浮かんだよ。俺の意識はここで途切れた。

次に目を覚ましたのは真つ白な部屋の中。ベッドに横たわっていた。

恐る恐る自分の体がどうなっているのかを確かめた。そもそも自分が生きてるかを確かめたよ。300kmオーバーからのクラッシュは生きている方がよほどおかしいからな。

俺の全身に包帯などが巻かれていたが骨折などはなかった。打撲や内出血は酷かったが。

「気がついたか」

如月が立っていた。俺は自分がどうなっていたのかを尋ねた。

「……2ヶ月も？」

如月が語った事。それは横転する程のクラッシュをした俺は2ヶ月という時間意識不明だったということだった。そして。

「お前にやる。やるかどうかは自分で決めろ」

如月が渡してきたのはトヨタ系のレーシングチームのドライバー募集要項だった。

「レーサーか……。やってみたい」

「お前は周りを見れないのか!!」

如月は声を荒らげて俺に掴みかかった。

「お前がついさつきまで寝てる間にお前の妻はたった1人で家族3人を支えていたんだぞ! お前の入院費に真の世話に! お前は自分の事だけか!!」

直後如月に殴られた。何十発も殴られた後、如月は言った。

「勝手にしろ。求めてる物のリスクもわかってないバカにもう話すことはない」

それ以降俺と如月の交流は途切れる。

俺はレーサーデビューした後、しばらくの間はテストドライバーとして活動しレーサーになって約1年になる頃に俺は本格的にレースに参加していく。

チームにいた時のマシンはMR2。スープラとは正反対のコンセプトで作られた車で俺は戦った。

チームに入って3年。

俺はチームとの契約が更新されなかった。つまりクビみたいな物だ。

しかし俺はレーサーを諦められず、自分でチームを立ちあげる決断をした。

「菊地真一レーシング」の名で全日本GT選手権に参加し始めた俺達のチームは苦難の連続だった。クラスはGT2。現在のスーパーGTでのカテゴリーで言うならGT300クラスか。

スポンサーの支援が受けられずに満足な活動もできず。だが仲間達と一つの目標に向かって協力する事が何より嬉しかった。中々勝てなかったが優勝した時の喜びは格別だった。

その時がレーサーをやっていてよかった、そう思えてな。

菊地真一レーシングを立ち上げて3年。

使用していた車のメーカーをトヨタから日産に変更した。

マシンはシルビア（S15）に。ストリート上がりの俺達がサーキットでどこまでやるかを試すという俺達なりの信念に従っての選択だった。

S15を初めて実戦投入したレースで俺は今までにない活躍ができたと思う。機敏な動きで次々と前の車をパスしていく。

これこそ俺の求めていた車だとわかったんだ……。

結果、レースは見事優勝。

数戦ぶりの表彰台だった。そして優勝。シャンパンファイトがとても楽しかった。

表彰式後、ピットにやってきた人物を見て俺は思わず足を止めた。

「如月……」

「久しぶりだな……菊地。レースを見ていたよ」

数年ぶりに出会う如月。如月は当時の真と変わらない歳であろう女の子を連れていた。

「俺の娘だ。明日翔って言うんだ」

「おとーさんのしりあいなんですか？」

無邪気に俺に聞いてくる少女。

「ああ。昔やんちゃしていたよ（笑）」

「余計な事を言うな」

如月にどつかれるが俺は続ける。

「俺は誰よりも速く走るつてのが夢なんだ」

「かつこいいい……！」

キラキラした目で視線を向けられる。

「明日翔、母さんで行っておいで。お父さんは話をするから」

「うん！」

少女は母親と共にどこかへ歩いていく。撤収作業をしていた仲間達もいなくなりピットには俺と如月の2人しかない。

「お前はレーサーになってよかったのか？」

如月は俺に聞いてくる。

「そりやそうだろ。俺は車くらいしか取り柄がないんでな」

「そんで家族に捨てられたらどうするのか考えているのか？」

「考えてないな。そうならないように俺は生きるだけだ」

「生きる……か。死にかけてお前が言うから説得力はあるが」

「そろそろ帰らなきゃな……」

仲間達を待たせてはいけない。慌てて準備を終わして立ち去ろうとすると。

「お前のやりたい事だけ見失うなよ」

如月の最後の一言はあっさりとしていた。

全日本GT選手権からスーパーGTに大会名称が変化しても俺達は継続参戦。
シルビアからZ33、そして1年前に新たに投入したGT-Rとマシンを変更しながら俺達は挑んだ。

だが……最後に優勝したのは4年前か。

ある時から勝てなくなり始めた。マシントラブルが原因で決勝レースでリタイアするなどチーム全体が崩れ始めた。

マシンを走らせるための費用に加えてマシンの性能向上のためのパーツ開発費、レースで壊れた車両の修理費などが雪だるま式に増える。雪だるまが崩れるように最初は走らせるための費用という僅かな崩れが整備費などが重なっていつてどんどん崩れ最終的に崩壊。つまり破産という最悪の形。それだけは回避したいと尽力し続けた。

そんな俺達の努力も虚しく菊地真一レーシングはスポンサーからの支援も断られ始める。

結果資金集めは困難になり俺達は崖っぷちになっていた。

そして俺はスーパーGTから今年限りで撤退する決断をした。それはつまり菊地真一レーシングの解散を意味する。

俺はレーサーとしての活動から身を引こうと思っていたんだ……。

「俺はスピードだけを求めて結局何もかもを無駄にしたんだ……」

真一さんの表情は暗い。

「そんな事ないよ……だって父さんは諦めずに挑戦してたじゃんか！」

真が感情的に答える。真にとってもそれは悲しいらしく真は真一さんをどうにか元気づけようとしていた。

「父さんのようになりたくてボクは走ってるんだよ！」

「お前は俺のようになるな！」

真一さんが声を荒らげた。自身のようにならないでほしいという真一さんの思い。

……あたしは浮かんできたあるアイデアを口にしようかと悩んだ。

夢だつてわかつてる。でも真一さんだつて頑張つて形にしてみせたんだ。あたしだつて……!!

「あたしを菊地真一レーシングのドライバーにしていただけませんか!？」

「やっぱダメか……」

真の家から帰るあたし達。結局断られてしまった。

「明日翔は……美世さんを目指してるの？」

希が不意に聞いてきた。

「……うん。だって……すごいじゃん。皆が注目するような人があたし達に近い事をやってたなんて。夢を叶えたなんてさ」

「そっか……。私は明日翔が羨ましいな」

「なんでさ？」

「明日翔は夢についてハッキリと言えるじゃん。私はそんな勇気ないから……。さつきみたいにズバって言えないからさ」

「レーザーになった今でも真一さんの言葉が忘れられない。物事に対しての熱さがそれでわかるもん」

「明日翔だつて最初は大変だつたでしょ？」

「そりやそうじゃん。レーシングカーの操作普通の車と違うもん。よくエンストさせて怒られたし」

「加えてルールつて縛りの中でどれだけ速く走れるか。ウエイトハンデとかいらな

いし
(笑)」

「それじゃダメだよ。1人だけ目立つちゃうじゃん？」

「それもそうだけどさ」

物事に対しての熱さ。

あの時の真はどんな思いをしていたんだろうか？

あたしは曲がりくねったC1を駆ける黒いスープレを思い出した。

Memory 06 怪物

「速かったよね……真ちゃんのスープラ」

「うん。あたし達のGT-Rと比べても……ほとんど大きな差がないくらいに。だからもう走れないってなった時の真の悲しみが今でこそわかる」

「明日翔のGT-Rも壊れちゃったもんね」

「……うん」

「GT-Rはどうしてるの?」

「あたしの実家に置いてある。親父をどうにか説得して。真一さんがいなかったらあたしはレーサーにもなれてないしさ」

「明日翔は真一さんにお世話になってるね」

「まーね。真もだけど」

真のスープラは速かった。

見かけだけでは終わらなかった本物のマシン。それだけにもう走れなくなったのは残念だと思う。

そんな怪物がモンスターできるまでの過程にあたし達も関わり……そして戦った。

しかし今思うと最初から真を首都高から降りさせるための事だったんだろう。それでも思わなければ意図的にスープラを「踏めない」車にするわけがない。

あの怪物とこのGTRが戦ったら確実にこのGTRは負けるだろう。チューンドカーを知り尽くした者達の手で組み上げられたスープラは現在の首都高でも通用するレベルの車だから。

次に浮かんだのはそんな怪物が生まれるまでの記憶。

真一さんの元を訪れて5日が経った。
希に買い物を頼まれたのでスーパーで食材を買ったあたしはある車が載せられた積載車を発見する。

「真のスーパー……なんで？」

黒い80スーパーが荷台に載っていた。

やがてその積載車の運転手であろう人が戻ってきた。あたしはスーパーの事が気になり、積載車を追う事にした。

「ヤ、ヤマモトスピードじゃん」

スーブラを載せた積載車を追いかけてたどり着いたのはヤマモトスピード。RGOと並びチューニング業界を古くから引つ張ってきたチューニング業界の大御所だ。

ヤマモトスピードの代表は圭介さんよりも前からGTRといつた日産系の車のチューンを行ってきた。ヤマモトスピードの代表もCRS圭介さんのトコを知っているそうで前に圭介さんが代表の事を話してくれた。

あたしは気になったが希からの電話で慌てて本来の目的を思い出した。希の家に帰った後に希に怒られた。

希に怒られた後、あたしは電話をかける。

相手は真だ。スープラをどうする気なのかを聞くために。

「もしもし」

「明日翔？こんな時間にどうしたの？」

真の声に混じって誰かが怒ってる声が聞こえる。そしてガツシャーンって音も。

「スープラをなにかするつもりでしょ」

「まー……うん。この間父さんの話を聞いてちよつとやってみたい事があつてね。父さんにも内緒にしているんだ」

この時あたしはそれダメじゃね？と思った。だって……。

「ヤマモトスピードの代表が真一さんの仲間って事は真の事も知ってるんじゃない……」

「……あつ」

真は忘れていた。真一さんの仲間であるヤマモトスピードの代表は真一さんにチューニングの事を話すかもしれないという事を。

「……しまったあああああああ」

「真、うるさい！」

「真ちゃんどうしたの!？」

だんだん電話の向こうの騒ぎが大きくなり、電話はブツッと切られてしまった。

「えー……?？」

次の日。あたしは希に真のスープラの事を話したけど……。

「うん、知ってるよ。山本さんが教えてくれたんだ」

なんと希はもう既に知っていた。しかもどうやらスープラのチューンに関わっているらしい。

「私は足のセッティングを真ちゃんに頼まれてるんだ。でも……私が仕上げたとしても確認するのは真ちゃんだから」

「もし私のミスで真ちゃんに何かあつたら怖くて」

希は自信なさげ。憧れの人物に頼まれてるだけあつて緊張感に包まれた希の顔。いつものおっとりした感じがナイ。

「完成してから渡すんでしょ、希」

「えっ、そうだけでも……」

「なら、あたしが試す」

「そーいう怪物はあたしの得意分野だから、なんてね」

普段から1000馬力を発揮するGT-Rに乗ってるからね。

「それにGT-R以外の車を知るチャンスだし」

あたしの狙いがコレ。GT-Rしか知らないあたしにとって他の車に触るチャンスだと思った。ちよつとした事からでも車を知ろうと。

「真ちゃんのように走れるのは明日翔だけだもんね」

この一言で事実上あたしも真のスープラの制作に関われるようになった。

スープラの制作は急ピッチで進む。そんな中であたしは様々な事を学んだ。ボディワークの方法に強いボディの作り方、足回りのセットアップ、ECUのセッティングに……。約1ヶ月があつという間に過ぎた。

その頃には夏が終わり秋が来ていた。

ヒ
ユ
ル
ル
ル
ル
ル
ツ
…
…
…

そして。

ボオウオオオオオオオオツ

「スープラの完成だ」

「……やったー！」

ヤマモトスピードの代表が呟く。あたしはそれに続くように喜びを口にする。

MAX800馬力をマークする2JZ^{エンジン}を心臓とするスープラはその分野のプロ達の手がけた。スープラの総合性能は申し分ないものだった。しかし。

「でも……。本人がここにいない」

ここにいるべき真は今日本にいない。仕事でニューヨークの方に行っているらしい。

「ほう、それが真の答えか」

背後からの声。

「真一さん……!?!」

あたしの後ろには真一さんが立っていた。なんで、と思ったが。

「……山本さん」

「ハハ、やっぱりバレるか」

山本さんが真一さんに裏でこっそり言っているもおおかしくなかったからだ。

「俺のスープレが可愛く見える、このバケモノ」

「俺はああ言ったが……やはり俺の娘だ。言われてもやると決めたら絶対やる。頑固だ」

「菊地の血はしつかりと受け継がれたな」

「ああ」

「ぜひ君の走りを見てみたいな。あのGT-Rは君しか扱えないそうだが」

「みたいです。希にもそんな風に言われて（笑）」

「乗り手を選ぶ車ってワケか……。面白いじゃないか」

真一さんは不敵な笑みを浮かべていた。数多くの走り屋達の中で初めて公道3000kmを達成した男はあたしが乗る怪物^Rですら躊躇なくアクセルを踏み抜きそうだった。

「真の代わりに運転するんだっただな？」

「はい。……言つときますけどナメないでくださいよ。あたしは本気で行くので」
「それは好都合だ。……君がレーサーとしての素質があるか見極めるだけだ」

午後11時。

あたしが運転する黒いスープラは横羽線を上っていく。

あたしの隣には希ではなく真一さんが座る。

希はあたし達が帰ってきた後にあたしの感想を聞いて足回りを再び調整する。

真一さんは何も言わずにあたしの運転を見ていた。

「流れが悪くない。トバスにはいいな……」

「真一さんも昔の血が騒いでるんですか？」

「だな（笑）。真にはああ言ったが俺も立派なバカだな」

どこか無邪気な感じな真一さん。真一さんは本当に走る事が好きなんだなって。

「如月はどうしている?」

不意にあたしの親父の事を聞かれる。

「……わからないです。あたしはウチを追い出されてからずっと実家の事に興味がなくて」

「まー……勝手にすよね、あたし。良くも悪くも相手を気にしないっていうか」

「……そうか。如月はああ見えて結構人を心配する奴なんだ。だから俺がレーサーになるって言った時も……」

今度はあたしが聞く。

「真ってなんで車が好きなんですか? 希から可愛い物がスキって聞きましたけど。あたしはカッコいいイケメン系女子って思っていましたけど」

あたしが持つ真のイメージはそんな感じだ。

ちなみに希が真に憧れてる理由は「カッコよくて大勢の人に自分を見せつけられるから」。

希はクラスで一番可愛い女子と話題が出れば必ず名前が挙がるくらいには人気がある。

しかし希は実はああ見えて結構繊細な性格。普段おっとりしてるけど周りの目気にしやす。

幼稚園の頃に希の実家が自動車整備工場である事からある男の子に「油まみれのぼっちい女」みたいな事を言われた事があり、本人はその場では平然としていた。

だがその後園長先生に泣きながらその事を話していた。

それを目撃したあたしはその男の子に報復したんだよね。

その時はあたしは年中組だった。男の子は年長組。

いきなり年中組から報復されるとは思ってただろう男の子はあたしにボコボコにされた後に希に謝りに行っていた。

たぶんその時の事があってか希は周りの目を気にして行動してる感じだった。今は

……そんな気はしないけど。

「真は小さい頃から俺の影響を受けて育った。空手を習わせたりな……。真は黒帯持ちだ」

「空手……？あぁー、やってた気がする」

あるテレビ番組で真が空手の型を披露していた覚えがある。

あとこれはネットにあったけどどつかの石油王のボディガード複数人を一人で相手にした……らしい。本当かどうか知らないけど。

「俺がイベントでカートを運転する事になってな。それを見ていた真は興味深そうに見てたよ。んで実際に自分が運転してみたらよっほど楽しかったんだろな。もう1回やりたいって言われたよ」

「真に速く走る方法を教えたなら吸収速度がすごいんだ、あつという間に基本をマスターした挙句自分で応用テクニクを作ってしまった。負けたよ」

そう語る真一さんは嬉しそうな表情だった。

「横羽の路面はずっと荒れてるな……。ここは得意かい？」

「んー……。苦手ではないですけど得意かと聞かれたらそうでも無いです」

「そうか……。真はC1が得意と言っていたが」

「……………何故？」

「真は首都高を走り始めた頃はC1で腕を磨いたそうだ。最高速よりも純粋にドラテクが重視されるテクニカルエリアのC1なら車の差も大きくなりにくい。例として挙げると200馬力のシビックが500馬力のGT-Rと互角タメで走れるんだよ」

「真はそこでバトルの基本を自分の身体で覚えていった。そして首都高の走り方を」

「……………真はC1だけなら自分が一番速いと思っただけ。事実真のスープラの前に出れる走り屋はある時までいなかったそうだ」

「でも、それは本物の走りを見ていなかったただけだった。ある時バトルしたが……完敗した。その車が……」

「あたしのGTR……」

「そうだ。真は自分が舞い上がっていた事に気付かされた」

「このスープラのチューンは君のGTRに対抗する為だろう。しかしこのレベルまで行ったら二度と引き返せなくなる」

「チューン前はギリギリ普段使いができた。でも今は戦う為だけに生きている車だ」

「そして失う物だけが増えていく。得る物なんて本当にちっぽけな物なんだよ。君もそれをわかってはいるはずだ」

「……もちろん」

こんな事をして得る物はただの自己満足にしか過ぎない。非現実的な事をしているスリルと背徳感。それだけのために人生を狂わせるような選択肢を取っていると同じだ。

ある程度横羽を上ると前にはいかにも走り屋感があるインプレツサ^G_Vが。

「ちようどいいな……。やれるか？」

「もちろん。このスープラならやれる」

あたしはインプをパッシング。するとインプはギアを落として加速していく。あたしもこれに追従していく。

あたしは羽田方面までペースを維持する。

先程まで結構な時間流していたがスープラは快調を維持している。

「行くなら勝島だな……」

真一さんが呟く。この先は緩めのコーナーが多くなる。ワンオフエア口を装備したスープラの独壇場となる。

時速300kmオーバーのスピードで安定して走れるだけのダウンフォースを発生させるエア口。ならやれる。

あたしはステアリングに取り付けられているミサイルスイッチを押し込む。するとスープラは先程までとは異質の加速を見せる。

インプのテール目掛けて前に前に出る。

加えてインプにプレッシャーを掛けるためにアウトからインへとラインを大きく変える。スープラはインプの懐に潜り込み並走する。

「スクランブルブーストってこんな感じなんですね……っ！」

真のスープラの奥の手「スクランブルブースト」。

ステアリングのスイッチを押している間は過給圧を2kgまで上げてMAX800馬力を絞り出す。

あたしのGTRとはまた違う方向で大パワーを發揮するスープラはスリップしたインプの前に出た。

インプも追い上げようと試みていたが流れが悪くなってからその行動は無意味となった。

あたし達がインプの視界から消えた後。

「……本当にすごいクルマですよ、スープラって」

「そうだな……。だからこそ真が無事に帰ってこれる事を願ってる」

その一言であたしは我に返った。さっきまでスープラの性能の高さを感じてテンションが上がっていたがこのスープラはあたしのクルマじゃない。真のスープラなんだと。

そしてあたしの隣に座っているのは真の父である真一さん。昔に死にかける程の事故を経験した人。

娘が自分より早く死んではいけないんだ……。

この後あたし達はスープラの調整のために再びスープラを希達に預ける。3日間の最終調整を経てスープラは本当の意味で完成した……。

そして……。

「これが……スープラ」

あたしはスープラの本来の持ち主である真にスープラのキーを渡す。
キーを渡された真はキーをまじまじと見てからスープラを見る。

真は生まれ変わったスープラを前に何を感じたんだろうか。

「頼むよ……スープラ」

真はそれだけ言ってスープラに乗り込む。キーを回してエンジンを掛け、何回かエンジン音を煽ってみる。

本物のチューンドカーに生まれ変わったスープラはJZエンジン特有の高いエンジン音を轟かせる。

直列6気筒ならではの官能的なエンジン音は咆哮するかの如く。まるで狼の遠吠えのように。

「明日翔、ありがとう。希も……みんなも」

「こちらこそ。あたしはG T—R以外の車も知れたし……何よりも車作りの最前線に近づけた」

あたしの言っている車作りはチューンドカーの製作を意味している。

「……父さん」

「わかっている。でもな……俺も心のどこかでこーいう事にまだ未練があるみたいだ。それがあって……俺も関わりたかった」

「ボクにはああ言ったクセに……」

「俺も結局バカだったよ。根っからのな」

会話の中でああ言ってるけども2人は親子だなんて思った。だってそうでもなきやあんな事は言えないからね。

家に帰った後、希が不意にこんな事を言った。

「真ちゃんのスープラは長くないかもしれない」

その時のあたしは「どういう事？」って思った。

車について学んだといっても希や山本さんといったプロレベルの人達のような知識なんてない。その時のあたしは希の独り言だと思っ事にした。

でも……よくよく考えたらあの時スープラに乗った時点でわかったはずだったんだ……。

「希はわかってたの？」

「うん……でも高木さんに聞く勇気がなかった」

「でも……真が知っていたらそれはそれで悪い事になってただろうし」

「そういえば……明日翔はどう見てるの？」

「んー……マニユアルがないって事がちよつと残念だけど……いいクルマだよ。雑誌の企画で乗せてもらったけど面白いなって」

「最近のスポーツカーってみんなどこかと共同開発だもんね」

「86だってトヨタとスバルの共同じゃん？メーカー単独で作るのも難しいんだよ……」

怪物が生まれたなら必然的に怪物を狩ろうとする存在が現れる。

首都高を本気で走るなら避けては通れないのがバトル。その中で絶対に決めさせら

れる選択肢。

あたし達が首都高バトルの中で選んだ物は……。

Memory 07 選択

「真がいちばん辛かったはずだよ。それを受け入れるしかなかったんだから。そしてあたしも」

「……そうだね」

首都高では「本物」達が鎬を削って争う。その様子は「伝説」とも許容される事も。首都高には様々な話がある。話を盛ったりしてゐる事もあるが……その話の中心人物^{キーマン}と車は必ず実在する。

今の首都高で「伝説」と称されるような人物をあたしは見たことがない。

首都高でのバトル自体がもうバカだと言われる今。首都高を本気で走っている走り屋をあたしは見えていない。たまにそれっぽい車を見ることはあっても所詮は本気組の

真似事にしか過ぎない。時代の流れは走り屋を衰退させているんだ。

「だからこそ……あの時が」

「走りに命を賭ける」それがあたし達の生きる意味のほぼ9割を占めたあの時。

あらゆる物を失って得ようとした物。「最速」という自負を持って戦った後に残る物。

あたし達……首都高を走った人間の選択肢が今を作る。

真の元にスーブラが戻って5日。

あたし達はスーブラを真好みのセッティングに変更する作業をしていた。

真は意外にも足は柔らかいセッティングが好みのようであたし達が真にスーブラを渡した時はあたし好みの硬めのセッティングだった。しかし引き渡されたスーブラを試運転した真の評価はあまりいい物ではなかった。

その後真自身が自分で決めていたセッティングの通りに希が変更したところ「多少変えたい部分はあるけどこんな感じの足だな」と言っていた。

そこからより真の好みに近づけるために試行錯誤していた。

「んー……。250kmくらいでレーンチェンジする時に微妙にリアの動きが遅い気がするんだよね。もう少しクイックに動けばなと」

「私もそこは思ったんだけどね。でもこれ以上変えると今度は直線ストレートでフラつかないか心配になるの」

「もうちよつとだけお願い！後はボクがどうにかする」

「わかったよ、真ちゃん」

希が真に足の感想を聞いて再びセッティングを変更する。あたしのGT-Rだってこんなやり取りをして組み上げられているハズなのに他人がこんなやり取りをしているのを見る事はあたしにとって新鮮な気持ちだった。

「乗れるようになったの?」

あたしは真に聞く。

「まーね。でもやつぱり全開はちよつと躊躇しちゃうかな」

真は連日首都高を走り込んでいた。仕事が終わったらずぐに首都高へ直行、そこから数時間にわたる実走テストが始まる。あたし達とは時間を決めて合流し、走り込んだ。ある程度走ったら集合場所のパーキングに向かい、希にセッティングの感想を話してその場で微調整、終わったらずぐにテスト走行再開という流れだった。

一昨日は真はオフだったためほぼ1日中首都高を走っていた。ちなみにあたし達は昨日は普通に大学があつたがサボってきた。大丈夫、単位取れるように計算してサボってるから。

真は数日間走り込んである程度はスープラに慣れた様子だが全開はまだ怖いらしい。チューンされる前の真のスープラはシャシダイ計測でMAX600馬力だった。これでも結構すごいと思うけど。

チューンされたスープラの奥の手であるスクランブルブーストを使用している時はMAX800馬力を発揮する。そりゃいきなりパワーの次元が変われば怖いってなるじゃん。

ま、あたしはそれ以上のパワーを持つGTRに乗ってるんですけどね。……の割にスクランブルブーストを使った時のスープラの加速に軽くビビったけど。軽く体が強ばってたよ。

「真ちゃん、終わったよー」

「ありがとう、希」

「いいの、真ちゃんの力になれるなら」

希は嬉しそうだ。スープラのチューンの話をした時に見せた不安そうな表情をしていた希とは別人のようなニッコニコの笑顔をしてるんだもん。

「そうだ……。もし良かったら真ちゃんの運転を見せてくれるかな？ そうしたら私も改善点を見つけれると思うし」

「もちろん！ ボクも全部わかるワケじゃないし希が見つつけてくれる方がいいんだ」

……なんだろう、このリア充みたいな会話。あれおかしいな、目からオイルが（汚い）

「というか、明日翔が真ちゃんにアドバイスしたらいいんじゃない？」

「えっ？」

「明日翔がテストしたんだよね？ ならボクより詳しいんじゃない？」

「あー、確かにテストしたけども」

「お願い！明日翔ならスープラをわかっていると信じてるから！」

そう言う真は何故か上目遣いであたしを見ていた。

普段のイケメン系女子のイメージはどこへ。今の真は乙女のカオをしてる。

ああ分かったよ！教えてやるよ！どうせ後でバトルになるんだ！教えればいいんでしょ！！

途中にどんなトラブルが待っているようにと真にあたしが教えてやるよ！！（ヤケクソ）

「……わかったよ（諦め）」

「ホント!？」

「うん。どうせ……後でやるんだし」

「へへっ、やーりい！」

「……明日翔？」

「あつはつは、あたしはなにか大切な物を無くしたかも」

そんな時のあたしはどんな表情をしていたんだろう。今でも分からない。自分なのに。

真の女の子らしさが女子力皆無のあたしの心を深く抉った後。

調整されたスープラで再び本線へ合流する。ちなみに真がスープラを運転、希が助手席に座っている。ならあたしはと言うと。

「……めっちゃ足痛い。あだっ!？」

「び、ゴメン！」

「真……段差避けて」

「ムリだつて！路面の繋ぎ目なんて避けれないから!!」

あたしはシートに座れず、クロモリ製の10点式ロールケージがガツチガチに張り巡らされているリアシート跡に立っていた。

あたしのGTRよりはまだマシンだが路面から伝わる衝撃は大きい。シートに座つ

てる2人はいいとしてあたしはモロに衝撃が伝わる。おかげであたしの足はガクガクだ。

……希はこうなる事を予測していたのか、それとも真が図ったのか。または真はあたしが乗る事を考えてなかったのか。……もし考えてないだったら真はどうやってあたしのアドバイスを聞くつもりだったのか。あたしが乗らなきやアドバイスもできないし意味ないじゃん……。この時ばかりは真の学力を疑った。

あたしも勉強はできないし希を頼るのがほとんどだけであたしだってこんな結果になるような考え方はしない。……自分のせいで家に居候させてもらっているあたしが言えた事じゃないや。今あたしの頭にはブーメランが刺さってるな。

「ト一角変えればたぶん……」

「ト一角?」

ト一角って何。まーた希が外国語みたいな事言い出した。

「明日翔は内股で歩く人とガニ股で歩く人をイメージできる?」

「ん?まー何となく」

「ホイール……タイヤでもいいか、トー角は人の足の向きと考えればいいの。内股ならトーイン、ガニ股ならトーアウト」

「インとアウト？」

「インなら直進安定性が良くなる。反対にアウトだと曲がりやすくなる」

「ならインがいいんじゃない？」

「そうはいかないから足回り専門のスペシャリストがいるの、明日翔。例えば湾岸はほぼ直線。それならいいんだけどね。んでもし湾岸からC1方面へ行ったらどうする？」

「え……つと？」

「そんな極端な足じやもちろん曲がれない。ならアウトへめいっばいやったなら？これもダメ」

「曲がりやすくするのがアウトの利点。明日翔はまっすぐ走れない車で湾岸を全開で走れるの？」

「えー……ムリ」

「でしょ？どつちかに極端に出来ないの。んでこれなら行けるって角度を今考えてるの。バトルする以上、C1も湾岸も……首都高のあらゆる場所で走るための足を今探しているの」

「あらゆる……場所」

例え話を交えながら説明してくれた希。あたしのGTRだって希がいつも見てくれている。何気ないように見えていた事がこうやって聞くとすごく重要な事だったんだと感じた。

翌日、希がスープラのセッティングを再び変更。今度はセッティングがドンピシャだったらしくテスト後の真の感想もスープラの走りに満足した様子だった。

そんな真を見てあたしはいずれ迎える事になるだろうバトルの事を考えていた。そのあたしの考えがすぐ現実になるという事を知らずに。

スープラが真の手に戻って2週間になろうとしていた。

あたしは希に教えてもらった通りに食器洗いをしていた。希の家に居候してそこそこになるが相変わらずあたしのできる家事は少ない。でも基本から手間取って希に助けを求めていた時の事を思うと今のあたしはだいぶ変わったと思う。女子力も上がったと思いたい……けどそもそも希は一人暮らしだからそういうのができないといけないんだ。家を追い出されてなんだかんだ一人で暮らしたあたしとは全然違う。

……女子力以前の基本的な生活習慣なんだよね、これ。

(……真はあたし達以外にも狙ってるクルマがあるの?)
(ただあたし達だけを見据えてあのスープラを作ったとは考えにくいし)

「明日翔?」

「わっ!?!? ってってって!」

考え事でボンヤリしていたあたしは希の声に驚いて手に持っていた希愛用のマグカップを危うく割るところだった。

「はー、危ない危ない。んで何?」

「今日上がってみる? 首都高に」

「んー……行くか。ここんとこずつとスープラのテストでGTRの感覚を忘れそうだし」

「チエックやつとくからね」

「お願い。……真いるかな」

「たぶん会うよ。どこかで」

あたしは住人専用ガレージに向かった希を見ながら残った食器を全部洗った。

一通りやる事を終わしてガレージへ。

ガレージに着くと希がG T—Rのタイヤの空気圧を見ていた。

「空気圧いつも通りで2.4 kgでいいでしょ？」

「うん。真と本気でやるのを考えたらコレで」

G T—Rはガレージから轟音を轟かせながら深夜の首都高へ出撃する。

そしてその時が来た。

「明日翔、あのスーブラ！」

「真——————ツ!!」

姿を見せた黒いスーブラ。漆黒のボディは多くを語らずに確かな存在感を放つ。

あたし達が関わった怪物^{モンスター}。そしてあたし達の走りを見た真。この組み合わせは今の

あたし達が一番恐れるモノとなった。

「スープラが離れるっ！」

「明日翔、ブーストはっ」

「フルブーストで！」

「でもそれだとC1まで耐えられるか分からない！」

現在あたし達は湾岸線にいる。真は間違いなくC1であたし達を突き放すだろう。それまでGTRに無理をさせられない。

だがスープラが速い。パワー自体はこちらが上なのにスープラに離されている。

一瞬でもミスした瞬間に勝敗が決まる。時速300kmでのバトルはこの一言に尽きる。

メーター読み312kmで緩いコーナーを抜けるにも息が上がる。緊張感が体を支

配する。

(それにしても読みが上手い)

(他車との位置関係の把握……直接見えていない所の動きを予測しての行動……あたしじゃとてもじゃないけどできない)

真のスープラはまるで後ろが直接見えているのかと思う程動きに迷いが無い。

首都高ランナーがまず磨かないといけない技術、それは「読み」。学校での勉強に必修科目があるように「読み」が首都高での必修科目。

当たり前だが公道には自分以外に走っている車がいる。首都高は2車線とか3車線もある。

邪魔になる一般車を避けないと当然スピードを乗せられない。そのためにレーンチェンジするワケだがただレーンチェンジすればいいわけじゃない。

例えば自分がレーンチェンジした先に別の車がいきなり割り込んでくるかもしれない

い。下手くそだとそれに驚いて車体の制御を失いクラッシュ一直線だ。そうならないように身につけるのが「読み」。

あたしも説明下手だけど「読み」に絶対必要なモノは「リズム」と「観察眼」かな。「リズム」はどのタイミングでレーン変えようとかを頭で考えたら動きが遅れてしまう。だからポンポンと動き出すんだけど自分のリズムを周囲に合わせて動かないといけない。リズムが揃えばお互い接触しないし安全だからだ。

「観察眼」は動き出しの際に周りの動きに不安要素がない事を確かめるために。ぶっちゃけ「リズム」よりこっちの方が重要だけどなかなか身につけられる物じゃない。パッと見全くそんな素振りを見せてない車が次の瞬間にいきなり目の前に出てくることだってある。それが首都高を走ってる上で頭に常に置いておくこと。だが意識していてもそれを完璧にやるのはまず無理だ。

首都高ランナーは長く走っている内に自然と観察眼が身につくらしい。実際あたしも無免許でR333を乗り回して1年が経つ頃にはそういうのが無意識に働いていた。

首都高ランナーに必要なこの2つの要素のレベルが真は非常に高い。

決して小型軽量でないスープラをまるで踊っているかのように操る真のドライビング。まさに人馬一体だった。

湾岸からC1エリアに入ろうとした時、その時はやってきた。

「あのFDは……!!」

「間違いない……あの人の!」

黄色いFD3Sが少し先に見えた。RE雨宮のエアロを纏ったその車は以前見たあのFD。

「小日向さん……！」

美世さんと共に走っているであろう彼。あちらもあたし達に気づいたらしく動きが戦闘モードに入ったのがわかった。切り替わったその瞬間に見えたオーラ。「別格」と言うに相応しい風格を見せる。

3台でC1を走って15分が経過しようとした時、希が何かを見た。

「追いかけてきてる車がいる!」

「……あたし達を追ってきた? 真のスープラに小日向さんのFD、そしてあたし達に……? 車種はわかる?」

「見えない……。けど……。すごく速い。コーナーリングだけなら……。たぶん私達より速い。コーナーが多いC1の中でならこのGTRや真ちゃんのスープラでも互角に走れる」

「嘘ツ……。!?!」

希が伝えた事に驚きを隠せない。

コーナリングスピードだけならこのGTRどころか真のスープラとも互角タメで走れる車がいるなんて。一体誰なんだ。

あたしは後ろから追いかけてきている車のドライバーをもっと早く思い出すべきだった。

格上のハイパワー車をコーナリングでねじ伏せる事のできるただ一人の天才ドライバーを。

「来たっ！……ランサーだ！銀色のエボX!!」

「……そうか、そりゃこんな事ができる!!」

姿が見えたと思った時にはあたし達の横に並んでいた銀色のエボX。

そしてそのドライバーは「銀色の革命者」と呼ばれる天才ドライバー星名夢斗。

あたし達は夢斗の首都高での走りを今日初めて見る。夢斗の走りは大胆で、しかし速い。

夢斗のエボXは圧倒的なスピードでコーナーを駆け抜け先頭の真スープラに近づいていく。

あたしもコーナリングにはそれなりの自信を持っていたが夢斗のエボXが見せる動

きを見て愕然とした。夢斗のエボはトツプギア⁵全開で瞬間的に300kmに到達しているであろう驚異のスピードであつという間に霞ヶ関のトンネルに差し掛かる。

車重はGT-Rより若干軽いエボX。だがこのスピードは車重なんて関係ない。これはドライバーの腕で作られているとあたしは思った。

超高速域から一気にブレーキング、シフトダウンしてスープラとFDをアウト側から一気にまくろうとするエボX。「攻撃的」と夢斗の走りはこの一言で説明できる。

コーナリングマシンと評されるFDを抜き、スープラのテールに一気に迫る。その動きの速さはまさに槍のようだった。

しかし小日向さんに慌てる様子は見られない。抜かれると最初からわかっていたようだ。

そうか……あたし達に出会う前からこの2人は……

共に走り、そして争っていたんだ……

どのくらい時間が経ったんだろう。……30分か。

……はあ。あたしは途中から希の声が届かなくなるくらい集中していたのか。

あたし達はC1を出て副都心線を経由し、グルッと回って湾岸へ出た。

ここがあたし達のこのバトルの終着点。ここからは本当に何が起こるか分からない。誰が勝って……そして誰が死ぬか。そんな物は神様だけが知っている。

「希……気のせいかな。真のスープラがなんかヘンだよ！」

「……うん。そうだよ……っ!!」

「……!?!」

真のスープラの異変。スープラは少しずつ、しかし確実に真のコントロールドから離れようとフラつき始める。それに気づいたあたしが希に聞くと突然涙を流し始めた。

「どういう事……説明してよ！」

「真ちゃんのスープラはもう終わるの……っ!!これ以上走ったら本当に真ちゃんが死んじゃうかもしれないのっ……!!」

「……なんで?あのスープラは……あたし達や山本さんがチューンしたクルマじゃん!そんなの……ありえなっこないじゃん……!!」

「希の言葉を必死に否定しようとした。でも……全身を飲み込もうとするモノが。それは「事実」だった。」

あのままだと確実にクラッシュする。それは予感ではなく確信に変わろうとしている今の状況。

「なんだ……!?急にコントロールが……!!」

真もスープラの異変に気づく。

(さっきまでのフィールが……ない)

(でも……まだだ!)

それでもアクセルを緩めない。踏まなかったら負ける。

漆黒のスープラは残り僅かな命の火を燃やして進む。

「おい……いい加減降りろ……。本当に死んじまうぞ！」

綱渡りのような不安定な状態で走り続けるスープラ。これ以上続けさせるわけには
いかない。

夢斗はスープラが降りるのを願う。

「もう……止まるんだ。ボディがもうダメだ……!!」

蓮は目の前のスープラの状態を見抜く。大パワーの代償はボディについた。負荷で
ボディが歪み悲鳴をあげているスープラ。

1年前にキツイ体験をした蓮はそれを再び繰り返させないためにペースを上げる。
300kmオーバーを出し続ける湾岸では車体への負担は決して無視できない。

ボディを補強していないとあつという間にボディがヨレてしまう。馬力を受け止め

られるボディが求められるのだ。

そんなボディになっているハズのスープラが今にも終わりそうだ。

「ごめん……真、降りて……!!」

あたしはフルブーストでエボXとスープラをぶち抜いていく。それに続いてFD、そしてスープラ。エボXはパワーの差から引き下がる。

「まだー……あっ!!」

真はスープラの切り札であるスクランブルブーストで明日翔達に立ち向かう。

ただでさえギリギリの所で走っているスープラのボディにさらに負担を加えていく。

(並べ……っ)

「並べええええええええっ!!」

真の思いに共鳴するかのようにスープラは一気に加速。

1000馬力台の明日翔達のGTRと600馬力オーバーの蓮のFDに並ぶ。

3台は一步も退かずに前へ前へと進む。お互いの意地がぶつかり合い周囲の空気を
変える。

ビリビリと感じるお互いの気迫。意志の強さが痛いほどに伝わる。

(もつと……もつと速くっ!!)

真のスープラがG T | RとF Dを突き放そうと加速しようとしたその瞬間。

「えっ………なんで」

真の漆黒のスープラが突如失速。みるみる後ろに消えていく。離されていたエボXにも追い抜かれた。

そう思った瞬間にはエボXが並びGTR、エボX、FDのスリーワイドという状態。あたしは無我夢中でアクセルを踏みこんだ……。

失速するスーブラのコックピットでは。

(皆が待ってる……。母さんや父さんだけじゃなく春香や律子……。プロデューサー)
(ここで死んだら皆が悲しんでしまう……。ボクが勝手にやった事がずつと皆に残る)

「……ごめん、父さん。ボクはわかってなかったんだ」
(『本物』の領域はボクには遠かったみたいだ……。でも、少しだけでもその領域に飛び込んで……。走れて楽しかった)

「明日翔……希」

「今夜の走りをボクはずっと覚えているから。皆に会って……こんなにも楽しい走りができる。もし……あの時に合っていなかったら今日はないかもしれないなかった」

「だから……ありがとう」

翌日、あたし達の生活は元通りに始まる。朝の支度をして大学へ。

昨夜のバトルの結果は結局よく分からない。

真のスーパーが降りて……残った3台で最後やったけど勝者は分からない。

あたし達のGTRはエンジンに大きな負担が掛かり、爪痕が残った。

今朝エンジンが掛からなくなり、急遽希のS15をガレージから出して大学に行ったのだ。

「真は降りる気なの？」

「うん。仕方ないけど……スーパーがああなっちゃったからね」

バトルの後、真一さんが真のスーパーを見たそうだがスーパーのボディは歪みきつてしまっていたそうだ。

真一さん曰く「ボディを犠牲にして僅かな時間だけ得られるフィーリング」だそうで

元々ボディを制作した時から意図的にボディを弱くしていたそうだ。

「真が自分のようにならないように」と真一さんが言っているのも不思議ではない。

真はスープラを手放す事を考えているらしい。真一さんが倉庫に置いておくかとも聞いたそうだがスープラを手放す可能性大と。

「ま……全力でバトルできて良かったんじゃない？」

真達とのバトルを終えたあたし達はいつも通りの生活に戻ると思っていた。しかしそうはならなかった。

真達とのバトルが皮肉にもあたしの今に関わる出来事に進むきっかけになっていたと当時のあたし達は思っていなかったから。

Memory 08 孤独

あたしは真達との走りを忘れない。

なぜならあの走りが無ければ今日という日を迎えられなかったからだ。

そして転機でもあった。

あたしがレーサーを志すようになり、本気で目指すきっかけでもある。

それは希なしで車を理解するという事で。

今あたしは希をGT-Rのナビシートに乗せている。もう一度言うが彼女と会うのは数年ぶりだ。んで彼女と会わなくなった時期が真達とバトルした時よりちよつと後。

希と一緒に過ごしていた中で突然訪れた事。再び「孤独」とあたしは向き合う事に

なった。

そんな時に会ってしまおう。人生って本当にこちらの都合なんて関係なしにイベントが発生する。

全てを繋ぐ「イベント」がああ時から始まったんだーーーーー。

真達とのバトルから数日後。

「柊木、後で来てくれ」

講義が終わった後に希が教師に呼び出しを受けた。

「何かしたの？」

「ううん、そんな事ないはず。……わからないけど」

「希が怒られるような事するわけないからな……なんだろ」

「とりあえず行ってみるね」

「いつてらっしゃい」

希は職員室へ歩いていった。

次のコマが始まっても希は帰ってこなかった。

結局希が教室に戻ってきたのは放課後だった。何を言われたのか希に聞いてみると

……。

「ちよつとだけ……大変だなんて思う事だよ。明日翔が心配」

んー………どういう事？なんてあたしが出てくるんだろ。

「ここで言いくいの？」

「うん………私の将来に関係する。でもその前に明日翔が心配で」

希が話せるようにあたし達は場所を変える事にした。

移動した渋谷某所のカフェで希は話し始める。

希が語った事は……

「海外留学!？」

「うん。私の進路に合わせてなんだって。2年間イギリスの方に」

「イギリス……」

「父さんや母さんも来ていて留学についての話を聞いた。留学については父さんや母さんは問題ないって。でも……」

「でも?」

「あたしが居ない間明日翔が心配なの」

「2年か……確かに」

「明日翔、よく聞いて。確かにあたしが留学するのは2年。でもその後なの」

「その後?」

「父さんが実家の宮崎に帰らないといけなくなつたの。あたしは留学から帰ってきたらそのままそっちに向かうんだって」

「それってつまり……」

「私は留学したら父さんの家に戻る。マンションに帰れないの」

「そんな……」

「父さんの家の方に戻ってきたらたぶんそのまま別の大学に入るとかするんだと思う。明日翔に会うことも難しくなる」

希が告げた事に言葉を失ったあたし。

「じゃ、じゃあいつから行くの」

「2週間後。あちらでの手続きとかはもう済んでいるんだって」

「早すぎでしょ……」

2週間後には希がこのマンションからいなくなる。あまりにも唐突に決まった事にあたしはどうすることも出来なかった。

「明日翔が生活に困らないように必要な物はそのまま置いていく。……もしそれらが無くなった時は明日翔自身でどうにかしてほしい」

数日後。

あたしは一人で埼玉のCRSにいた。圭介さんに真達とのバトルから不調が続くG
T—Rのメンテナンスを頼んでいた。希が留学する事を圭介さんに話す。

「随分突然だよな……。明日翔は何も聞かされてなかったのか？」

「はい。希も最初そんな話が出てたなんて知らなかったみたいで」

「ヘンな話だな、本人がそれ聞いてないって。んで……。明日翔がこの車を見れるかって心配してんだろ」

「……はい」

「ま、イザという時は俺も助けるが……。走りはどうするんだ？」

「え？」

「希が居なくなったら明日翔だけで走るんだろ？」

圭介さんの言葉にハツとするあたし。

なんでこんな重要な事を忘れてたんだ。いや、その事実を認めたくなかったのかもしれない。

「……希がいらないならソレに合わせた明日翔なりの走り方をするしかないだろ。んじゃ、G T—Rは俺がやつとくから」

「あ……はい」

従業員の人に案内され、白いK6G T—Rに乗る。K6でC R Sを出ていく際に見たあたしのG T—Rがやけに頼りなく感じられた……。

4日後、あたしのG T—Rのチェックが終わったと連絡を貰い、今度は希と一緒にC R Sへ。

今日がC R Sに希と行くのが最後だと思っていたあたし。希が出発するまであと1週間を切っていたから。

希がG T—Rを見てやりたくても見てやれない。最後の最後まで希を心配させたなと今でも申し訳なく思ってる。

CRSに来るなり圭介さんから説明を聞く。しかし圭介さんが告げた事は……。

「駆動系？」

「そうだ。出力に耐えられていないんだ」

圭介さんが語ったのはGTRの駆動系のトラブルという事だった。

推定1000馬力を発生するエンジンもそれを受け止められる駆動系がなければただの暴れ馬に過ぎない。

それに合わせてミッションなどに社外の部品を使用して強化していたのだがそれすらダメになっていると。

特にミッション周りが大きくミッションが壊れかけ、クラッチはもう使い物にならない状態だったと。

「このままでは恐らくエンジンよりも先に駆動系が逝ってしまうだろう」と。

「ミツシオン内部の部品はウチのキットを組めんで対応したが……クラッチの方はダメだ。他のショッップもその辺りの対策で頭を悩ましてるそうだ」

「……そうですか」

「なあ希、希は明日翔が心配じゃないのか？」

「もちろん心配ですよ。明日翔が私がいなくても大丈夫なのか。幼馴染として……心配なんです」

希の表情は悔しさが滲み出ていた。その理由はあたしが一番わかっている。

そして迎えた出発の日。

「搭乘される皆様はチェックインカウンターへお越しく下さい」

大勢の人の声や荷物を運ぶベルトコンベアが動く音の中ではつきりと聞こえたアナウンス。

「ごめん……そろそろ行かなきゃ」

「うん……」

キャリーケースを引いてカウンターの方へ歩いていく希。

「希!!」

あたしは無意識に希を呼び止めていた。

「……あたしは自分だけでは何も出来なかった。生きていく事さえも」

「元はと言えばあたしのせいで希も巻き込んでしまった。……なのに希はいつもあたしの側においてくれた」

「ずっと……ずっと迷惑かけてきた。自分が情けなくって!!しょうがなかった!!」

「だから……もうあたしを忘れてほしい」

走る事しか取り柄がない。それは普通に生きていく上で必要ない。つまりあたしは何もできない。

そんなあたしの馬鹿げた事にもう希を巻き込みたくない。

そんな一心であたしは最後の最後に希への謝罪と決意を告げる。

「ううん、忘れない」

「だって……明日翔は私の友達だもん。ずっとずっと一緒にいた友達を忘れるなんてできないよ」

「明日翔は私を引っ張ってくれた。周りが怖くて動けずにいた私をいつも動かしてくれ

た。もし明日翔がいなかったら真ちゃん達とも会わなかった」

「私は自分のやれる事をやっただけ。明日翔は明日翔がやれる事をやっただけ」

こんな時ですら希はあたしの事を思っていた。そう思うと余計に情けなくて。

「そんな顔しないで。かつこよくて……可愛い顔が台無しだよ……っ」

段々と近づく別れの時。それが近づいてるのがわかる。涙がとめどなく溢れる希を見ているとあたしも辛かった。

「だから……明日翔。私の事は心配しないで。私も頑張るから……っ。明日翔は明日翔の頑張りたい事を頑張って……っ！……だからっ、またいつかつ……」

一言を話すのも精一杯な様子の希。希だっって覚悟を決めている。ならあたしも決める。

「うん……。ねえ、希。もし……また会う時は……」

「自分の夢を叶えていて、絶対にすごいドライバーになつてゐるって約束する!!こんなあたしでもこれだけは絶対に守つてみせる!!だって……あたしは車が大好きだから!!」

「あたしの名前がどこでも出てくるくらい有名なやつ……希が世界中のどこにいてもあたしの名前が伝わるように!!」

そう言ったからには必ずやるしかない。そんな意識じゃないときつとあたしは何時までも変わらない。だから今この時あたしを変えると。

「そつか……。……明日翔」

「なに?」

「いつかまた明日翔と会えたら……。もう1回GTRで走ろう。今度はすごいドライバーになつた明日翔のドライブで」

「うん。それがいいね」

「じゃあ……希。ありがとう」

「うん。明日翔も頑張って」

ゲートの向こう側に消えていく希の背中。

夕焼けで赤い空の下で最後にあたしに向かって微笑んだ希をあたしはその後数年間に渡って夢で見続ける事になった。

時間が流れて10月。希が行ってから3週間が経った。

あたしは自分の持っていたいらぬ物を売り、希が残していった少しのお金の足しにして生活していた。

G T—R がガソリンを食うため最近G T—R をあまり動かしていない。最後にG T—R を動かしたのは希が出発した後に買い物をした時の2週間前。

…希が行ってからの生活にもある程度慣れた。いや、元に戻った。アパートにあたり1人で住んでた時の生活に。

希はそれなりの食料とたぶん1ヶ月分かそのくらいの生活に必要なお金、そして自分のシルビアを残していった。

希は「好きに使っていい」とシルビアを処分せずにガレージに置いたままにしていた。だがあたしはシルビアに乗る気はなく、今はGTRと仲良くガレージ内で休んでいる。

そんな時に来た1件の電話。
あたしは慌てて電話に出る。

「はい、如月です」

「おお、明日翔か。突然で悪いな」

「圭介さん？」

「ああ。……希はもう行ったんだっけか？」

「……ええ。あの、どうしたんですか？」

「おお、忘れるトコだった。実は今ウチに客が来て明日翔を知らないかって」

「あたしを？」

「ああ。原田さんって言ったっけな」

「あの、その方に電話変わってください」
その名前を聞いてあたしは思わず言った。

「もしもし、如月明日翔です」

「お、あの時の君か……」

聞こえてきた声の主、それは。

「原田……美世さん」

「うん、原田美世だよ」

夏に見たあの紅いGT-Rのドライバー。アイドルであり、レーサーであり。そしてあたしの憧れの人だ。

「あのっ、あたしに何の用事ですか」

「あたしね……1回君と走ってみたい。乗せてもらったあの日に君の走りを見たけど……GTRの走りができてた。あのR35を上手く走らせられるのは君だけだって聞いてね」

「……確かにあたしだけですけど」

「君のその腕を確かめたい。そうすればあたしも前に進めると思う。何となくだけどそんな気がする」

美世さんの言葉にあたしの心が揺れる。

真達と走ったあの時からあたしの走りは方向性を見失いかけていた。だが憧れの美世さんと走ったらたぶん何か掴めるんじゃないかと。その可能性にあたしは賭けた。

「あたしも走ってみたいです。『紅のシンデレラガール』の走りをぜひ見てみたい！」「なるほど……ね！わかったよ！」

こうしてあたしと美世さんの初めての走りに続くことになる。

「そんな事があつたんだ」

「まーね。というか希涙脆いしき」

「明日翔も泣きそうなのかよく分からない顔してたよ？」
「えっ」

希と話すのが当たり前だと思っていたあの時の心細さは二度と体験したくない。そ

んな事もあって今こうやって会話できている事が嬉しい。

「まー、その時か……。本当に壊れてびっくりした」

あの走りがあたしと美世さんお互いに「きっかけ」になった。

そのきっかけに至るまでが長かったけどそれは必ず通る道だったんだと思っている。

その「きっかけ」というスタートラインに立つのもすんなりとはいかなかったけど……。

Memory 09 意味

「美世さんのR34って今もあるのかな？」

「わかんない。そもそも海外に持っていくワケにはいかないでしょ」

「それはそうだけど……小日向さんは日本に何回か帰ってきた時にFDに乗ってたんでしょ？」

「それは聞いた。けど美世さんは行つてから一度も帰ってきてないハズだし……。たぶん小日向さんのFDと一緒に何処かに預けられていたんじゃない？」

伝説を見てきた美世さんが操った紅いR34。あたしも一度だけ乗ったけどあの車はバトルする事が最高の生きがい、もしR34が意志を持っているのならそう言うと思う。

あのバトル走はGT-Rリという車の存在意義を身をもって理解できる。

レースで勝つために生まれた車、G T | R。その名前は「勝利」を背負っていて。相手がどんな車であろうと「勝利」を狙う。それは同じG T | Rでも。

昔のレースで「G T | Rの敵はG T | Rだけ」と言われていたそうだけど実際そうだった。

あたしのG T | Rと美世さんのG T | R。

世代を越えて争ったG T | R。「怪物」と「伝説」。見据えるのは「最速」ただそれだけ。

速さにあたしは憧れたんだ。

美世さんとのバトルが決まった翌日。

数日後のバトルを前にあたしはというと……。

「はあああ……」

……深いため息をついていた。希抜きでのバトルは初めて。車の不調をズバズバ言える希がいなければまともな走りができない。

しかも相手はあの美世さん。あの紅いR34を一人で仕上げたであろう彼女の前に希がいたとしてもまず勝負になるのだろうか。

この時点でもうあたしにはネガな要素だらけ。

「あたしだけでやらなきゃいけないのは分かってるけどさあ……」

しかし変わらない現実にいつまでも打ちのめされてるワケにはいかない。

あたしはある事をするためにガレージからGTRを出して朝早くから街へ向かった。

数日後の夕方。10月とはいえ少し冷え込んできている。

明日の夜は美世さんとのバトルが待っている。あたしは家の近くの公園で黄昏てる。

(明日の走りに……あたしは何を望んでいるんだ?)

(走りにマジになって……失った物を取り戻せるワケでもないのに)

(ガソリン代にオイル代……タイヤ代……)

(そして希……。車に取り憑かれてこうなったあたし)

(……きつと真はわかっていたんだ。こうなるかもしれない……。真一さんの気持ち
がわかってたから降りる覚悟を決められたんだ)

「そんな顔してどうしたんだい？」

「真……」

声の主は真。それと。

「んなツラすんなよ。生意気でクソ度胸で突っ走るお前はどこ行った？」

「……あんたに慰められるなんて思わなかった」

星名夢斗に慰めになっているのかも怪しい一言を浴びせられたあたしはイラツとして立ち上がる。

「お、それでお前だろ？」

「余計なお世話だし」

「変……身!!……さあ、振り切るぜっ!!」

「さあ、地獄を楽しみな!!……うーん、勇気がいるな」

あたしは仮面ライダーごっこを始めた夢斗と346プロのアイドルだという南条光という少女を見ながら真に心境を打ち明ける。

「真はスーブラどうしたの？」

「今はまだ家にある。処分しようにも廃車にする際の手続きとかそういうのがめんどくさくてね……。まあ、その内に手放すかな」

「明日翔はどうしてるの？明日バトルするんでしょ？」

「うん。あたしだけでやれるかなって」

初めて真にあたしの本音をぶつけた。真は家庭の環境もあって「走り」の知識量の多さに恵まれている。けど、あたしはただ走るのが上手いだけで理論に裏付けされた速さとかはないだろう。あたしの親父が車嫌いであたしを追い出して……。その後自分だけの力で見よう見まねで身につけた技術。はつきり言っただけの限界がある。

「明日翔は速いよ。だって……。あの日に走れたんだから」

「速い……。か。でもそれが『明日に繋がっているか』そう考えたら無意味に見えてしまっそうで」

走り屋って何だろう。自分の欲求のままに法定速度よりもっと速いスピードで公道をぶっ飛ばす、夜な夜な峠でドリフトする、仲間達と走る……。走り屋のやる事はプラスになるような事は無いはずなんだ。

「でも……そこから夢にする事だつてできる。ボクの父さんや美世さんだつて『走り屋』がルーツじゃないか」

「自分の気持ち次第なんだよ、きつと。夢を叶えた人達はみんな本当にソレが好きで好きで仕方ないつて言えるくらいに気持ちが強いんだよ」

「気持ちの強さ……」

「気持ちの強さ。あたしは言うだけなら度胸は誰にも負けないつて今まで思っていた。でも、その一方で気持ちの弱さが顔を覗かせるのも知っている。」

「もしも、あたしが実家を追い出される時に粘つて親父を説得すれば状況が変わった可能性もなくは無かったはずだ。でもあたしは弱かった。一方的に突き放されただけだった。」

「こう言い切る事のできる真の強さが今のあたしには眩しかった。」

「真はアイドルになつて心が折れそうになつた事はないの？」

「あたしは無意識の内に呟いていた。」

「心が折れそうになつた事はもちろんあるよ。今は慣れたけど765プロに入社した直後は辛い事だらけだった」

「見た目が男っぽいつて理由だけで偏見を持たれたり……ボクが望んだフリフリ衣装

で生放送に出たらドン引きされて雪歩にも『そんなの誰も望んでない』つても言われた事あるし。ボクの考えるアイドル像とは違う方向に進んでいく事が怖かったんだよ」

ああ、やっぱり真だって一人の女の子だ。普通に悩む。……内容までは普通ではないけども。

「でも、場数を踏んだらいつの間にか悩む事が少なくなっただ。その時は傷ついてても『だったら状況を良くするためにどうしたらいい?』って考えれば悩みが小さく見えて」
「だから明日翔だって今悩んでいてもそれはその時だけできつといい事が後で待っているさ」

アイドルらしい笑顔であたしを見る真。真だってあたしと同じような思いをしたんだと知ったらあたしもなんだか気持ちが悪くなってきた。

「そーやって話せるのはいいい事だろ?」

「話に入ってこないで」

夢斗が会話に割り込んできたのでちよつとムカツとしたが。

「悩みを誰かに話せるだけ恵まれてると思つた方がイイぜ。悩みを周りに伝えられなく

て自分だけで抱え込む事程とにかく死にたくなるような状況以外に辛い事を俺は知らねえ。ついさつきまでのお前みたいな事を俺は身をもって体験してんだよ」

「何それ……」

「お前は大学生生活に馴染めてるか？んで自分の事を認識してもらえてるか？」

「『認識してもらえない』それ程悲しくて辛いモン以上の地獄を体験してないだけお前は幸せなんだ」

そう話す夢斗の顔に見えた悲しみと同じ物をあたしはつい最近見たばかり。出発する前の希だ。

希は知り合いがいない海外に自分だけで向かった。心細かっただろう。

今はきつとクラスに馴染めてると思うけど、最初は不安だったに違いない。

夢斗は何もかもを見通しているようだ。「根拠」を持った話し方が嘘じゃないとわかるまで時間はかからなかったから。

「スツキリしたトコで美世さんからメッセージだ。見ろ」

夢斗から渡されたスマホの画面に並ぶ文面。

「明日夜11時にC3の新倉PAで集合ね。ちゃんと準備してきて最高の走りをしよ

う。明日の走りがお互いにいい物に繋がる事を願って」

「美世さんも『同じ』かな？」

あたしと同じく走りに意味を見つけるためにあたしとの走りを望んだ、きつとそうだと思う。

美世さんがバトルをしたって言うからには美世さんは本気でやるだろう。身体の怪我也気にしてないかもしれない。というよりも怪我治ってる？

「ま、走るの俺達じゃねえしこんな事しか言えないが……せいぜい頑張ってこい」
「言われなくても、ね」

そして迎えた当日の夜。

エンジンを切つてあるG T—Rの車内は静か。集中力を高めていたあたしの前に爆音と共に現れた紅く輝くR 3 4 G T—R。オーラを強く感じる圧倒的な存在感がある。

G T—Rから降りてきた美世さんは開口一番に。

「あれ？色変わった？」

「ええ。あの色は『2人』で背負う物だから。コレは今のあたしを意味してます」

そう言ったあたしの隣にあるG T—Rはあの派手なチアフルピンクメタリックではなくシンプルな赤レッドに塗り替えられていた。あたし1人、自分だけで塗り替えたんだ。

「んじゃ……早速。流れを見ながら5号からC 1へ。そこからレイブリを渡って辰巳へ」

「了解です。あたし……全力でやります！」

「その心意気よし。悔いのないようにやろう、明日翔ちゃん」

2台のG T—Rがゆつくりと動き出す。似た色をしているが車の性格は正反対。

あたしのG T—Rは圧倒的な馬力パワーが武器。対して美世さんのG T—Rはどんな状況でも確実に速さを出す安定感が武器。

美世さんのG T—Rに乗った時に感じた完璧とも言えるであろう紅のG T—Rの完成度。もし希が乗っていたらどんな感想を残したのだろう。

そしてドライバ美世さんはレーシングドライバーでもあり、「迅帝」を打ち破って「伝説」となった超一流の走り屋でもある。

これだけの相手と走れる事だけでも今のあたしには充分すぎる程に意味がある。

でも、それは表面だけの話。深い意味を見つけるには走りで見つけるしかない。

だから今夜、あたし達は戦う。走ってあたし達に残る物は何か。それを確かめるために。

あたしにとって大きなターニングポイントになる今夜の走り。
そんな事を知らないあたしとG T | Rは長い夜の闇に飛び込んでいく……。